

東洋學報

第參拾七卷第四號

昭和三十年三月

論 說

魏書粟特國傳と匈奴・フン同族問題

榎

雄

匈奴とフンとが同一民族であるか否かといふ問題は、十八世紀の中頃から今日に至るまで多くの人々によつて論ぜられて來た所である。或る人々は匈奴とフンとの名稱の類似や匈奴そのものがフン乃至はフン類似の名で呼ばれてゐることから、その同一民族たることを主張し、他の學者は匈奴とフンとの言語の相違から、その互に異なる民族たるべきことを強調してゐる。一方、古文獻・古地圖の精査によつて、匈奴がフン乃至はフン類似の名稱によつて西方の記錄に現はれてゐることが一層明かにせられ、更に近年蒙古高原や南露東歐の考古學的調査が進歩し、匈奴及びフンの使用したと考へられる武器・日用器具等の間に著しい類似性が發見せられ、匈奴の西方移動路と推定せられる所から漢式鏡その他の支那製遺物が出土して、それらが匈奴の西遷に伴つて運ばれたことを示してゐるやうに思はれる所から、匈奴とフンとの同一民族たることに疑なし

と信ずる人々が多くなつた。アルトハイム教授の「アッチラとフン族」やソ聯邦近刊の百科辭典の解説などは匈奴・フンの同一民族たることに問題なしとしてゐる好例である。²⁾しかし、言ふまでもなく、蒙古高原を中心とする匈奴の活動が支那の文献から消えてから約一世紀ほど經つて、南露・東歐に於けるフンの活躍が始るのであつて、兩者は年代的に極めて接近してゐるばかりでなく、ユーラシア大陸の東半と西半とをそれぞれ活動の舞臺とした兩者は地域的にも頗る近接してゐるのであるから、これら二つの遊牧民族の生活様式や文化に互に酷似した要素の多いこと、支那製品乃至は倣製品がこれら兩地域に流布してゐたことは寧ろ當然である。遺物の類似は兩者の同一民族たることを證明する有力なる支へには相違ないけれども、それあるが故に兩者は同一民族であるとは言はれない。又、言語の相違に基いて兩者の異つた民族たることを主張するのも、少くとも今の段階に於いては決定的でない。匈奴の言語と言はれるものも、フンの言語と傳へられるものも、今日知られてゐる限りでは、極めて少數である上に、匈奴もフンも共に幾つかの異民族を包含した政治的集團であるから、例へば今日匈奴語として傳へられてゐるものが、果してすべて純粹の匈奴語であるか否かは疑はしい。フンの言語についても、同様のことが考へられるであらう。要するに匈奴語・フン語そのものの性質が十分に明かにされてゐないのであるから、兩者の異同を論ずることは時期尙早であらう。何れにしても、より積極的な、より決定的な證據が提出せられぬ以上、兩者の異同を論斷することは出来ないのである。

所がここに匈奴・フンの同一民族たることを立證する積極的な根據と考へられてゐるものが一つある。それは魏書^二西域傳粟特國の條の記事である。直接この記事に基いて兩民族の同一なことを論じたのは、アリストフ(N. A. Aristov)とヒルト(F. Hirt)とであるが、ヒルトの議論は今日なほ一部の人々には易ふべからざる鐵案の如くに看做されてゐる。我が國では内田吟風氏がその代表で、ヒルトの所説に滿腔の賛意を表して居られる。³⁾

さて問題の魏書二〇の記事は次の如くである。

粟特國、在葱嶺之西、古之奄蔡、一名溫那沙、居於大澤、在康居西北、去代一萬六千里、先是匈奴殺其王而有其國、至忽倪已三世矣、其國商人先多詣涼土販貨、及克姑藏、悉見虜、高宗初、粟特王遣使請贖之、詔聽焉、自後無使朝獻、これに對するヒルトの解釋の要點は左の通りである。

(一) 忽倪なる匈奴の粟特國王が北魏の高宗(文成帝)の初め—漢西域圖考の著者(李光廷)によれば太安の初年(西曆四五五年乃至四五七年頃)—に北魏に遣使した時より溯つて三代前—その間約百年と推算して、西曆三五五年頃に、匈奴が奄蔡(アラン)を征服したといふ魏書の所傳は、フンのアラン征服に關する西方の史實に完全に照應する。

(二) 匈奴粟特國王忽倪—ヒルトによればその古音は *Hut-ngiek* 或は *Hut-nik*—はフン王アッティラの末子にして、その後繼者なるヘルナック(エルナック、イルナスとも云ふ) *Hernac, Irnach, Ernak, Irnas* に正しく該當し、或はその兄にして嫡子なるエルラク(*Elrac*)とも認め得ぬことはない。

(三) 所謂粟特國とはヨルダネス(*Jordanes*)の史書にサダゲス或はサタガリー(*Sadages, Satagari*)と記されたところのアランの一支族の居住したクリミヤ半島のタウリエン地方、所謂スグダク(*Sughdag*)に相違なく、ヨルダネスによればアッチラの嫡子エルラクの戦死後、その餘の兄弟(うちにヘルナックを含む)は黒海方面に退いたとあるから、クリミア半島のスグダクを以て匈奴王忽倪(フン王ヘルナック)の據つた粟特國と見做し得る。(江上波夫氏の要約に従ふ)

更に内田吟氏はこの粟特國はヒルトの言ふ如くクリミヤ半島のスグダクであつて、中央アジアのソグディアナとは考へられないことを、十二の論點から主張された。

(一) 古の奄蔡であること、

(二) 大澤に臨むこと、

(三) 康居の西北であること、

(四) 魏の代都より一萬六千里の距離あること (サマルカンドなる悉萬斤國は代を去る萬二千七百二十里、これらの數字は勿論極めて杜撰なるものではあるが、大體の遠近を知り得る)、

(五) 匈奴が其國を奪つてゐることよりして之が中亞 *Sogd* 漢史の屬繇・粟弋とは又別箇のものであることが明瞭に解るのである、

(六) 魏書西域傳は魏收原著の姿を大體殘し、其記述には大體信憑を置き得る性質なること、

(七) 魏書本紀宋書周書等を檢するに粟特國は魏朝に九回の朝貢を爲し、北周に至つても朝貢してゐ、殊に多數の國人が北魏に虜はれて居たことよりしても、當時の支那人が粟特國に就きて左程の誤つた知識を有するとは考へられぬこと、

(八) 魏書西域傳にソグディアナを示す悉萬斤國 (サマルカンド) の傳が粟特國と別所に立てられてゐること、

(九) 且つ魏書本紀太和三年西域諸國入貢の條にも、吐谷渾……粟特・州逸……悉萬斤等國各遣使朝貢と粟特と悉萬斤とを別記してゐること、

(十) 若し粟特が中亞のソグドならば、太和三年後朝貢の絶える理由がないこと (假りにソグド國の中心が他所から大和三年頃悉萬斤國に遷都したとしても、それならば小名稱悉萬斤國が消えて大名稱粟特が続がれるであらう。且つ北周保定四年に再び粟特の名が見えるのは、其地が極遠で永らく朝貢が杜絶してゐたことを想はしめる)、

(十一) 粟特が中亞のソグドであるならば、嚙唃の襲奪のことが記さる可く、匈奴の亂入が記されてゐる筈がないこと、(當時嚙唃に關して支那人は相當の知識を有し、匈奴と間違へると思へず、殊に其王名を知り、その種人引取の懇請をさ

（受けてゐるのである）。

（十一）元史類編⁽⁴⁾に引用した十三州志に「奄蔡粟特各有君長」とあるのは、粟特が中亞に在るを示さず、却つて奄蔡即ち Tanais 河地方の遠西地方内に相接して存在し、唯別々の君長を當時頂いてゐたことを示すものであること。

かくて内田氏は、「少くとも魏書・周書の粟特のみは中亞のソグド、漢史の粟弋・屬繇でなく、魏書・周書の粟特傳は誤記に非ず正當である、従つて自分は之を主たる資料としてヒルト教授が粟特 Sudak, Herak 匈奴忽倪王の比定、フンネンのアラネン征服と匈奴の阿蘭併合、北匈奴フンネン同一を論述した立場を承認するものである」と結ばれた。⁽⁵⁾

これに對し、ヒルトの提説に反對する人も少くなかつた。我が國に於いては白鳥庫吉博士、歐米に於いてはパーカー (H. Parker) ・メンヒェン＝ヘルフェン (O. Maenchen-Helfen) の諸氏である。白鳥博士は一九二四年「粟特國考」を著してヒルト説を批判し、次の如く論ぜられた。⁽⁶⁾

（一）後漢書西域傳の粟弋（粟弋の譌）、魏略西戎傳の屬繇、晉書四夷傳康居國の條の粟弋は Suk-dok, Suk-do に類した音を現し、Soghd, Sughda 即ちソグディアナに該當する國名であるが、その位置や產物に關する記述から考へて、中央アジアのソグディアナと看做すべきである。従つて、これらの諸記錄に年代的に接續する魏書の粟特國も、中央アジアのソグディアナと考へられる、

（二）魏書に「古之奄蔡、……居於大澤、在康居西北」とあるのは、粟特國の一名溫那沙と奄蔡の名稱の類似から兩者を同一國と誤解した結果、奄蔡に關する史記大宛傳・漢書西域傳の記事を挿入したもので、奄蔡と粟特とは全然別の國である。

（三）粟特國に侵入した匈奴は純粹の匈奴ではなく、エフタルで、王忽倪はエフタル王 Khushnawaz であらう、

（四）溫那沙は「溫姓の九王」の意味で唐書西域傳康國の條に言ふ昭武九姓に相當する、更に通典^三に粟弋・粟特の二

名と記されてゐる特拘夢は Toquz Manab 即ちトルコ語で九王を意味する名稱の音譯であらう、

(五) 魏書の本紀に初め粟特國の入貢が記され、後悉萬斤(サマルカンド)がこれに代るのは、ソグディアナの中心がブハラ(Bukhara) 即ち粟特から、サマルカンドに移された結果で、移轉の時期は粟特國が最後に入貢した太和三年(四七九)以後であらう。

博士はその後、溫那沙は匈奴九王の意味であるとし、粟特國を侵した奄蔡は、悅般國に據つた郅支單干の後裔であらうと論ぜられた。⁷⁾

かくて同じ魏書の記事に對し全く異つた二つの解釋が提出せられたのであるが、江上波夫氏は魏書の記事は中央アジアのソグディアナとクリミヤのソグディアナ乃至はスキタイとに關する二系列の所傳が、名稱の同じことから混合したものであらうといふ新しい解釋の下に、

(一) 魏書粟特國傳の中、「古之奄蔡、一名溫那沙、居於大澤、在康居西北、去代一萬六千里、先是匈奴殺其王而有其國、至忽倪已三世矣」はクリミヤの粟特に關する記事で、溫那沙はマルクワルト (J. Marquart) の説いた如く恐らくアラシ語即ちイラン語の一派で匈奴國或は匈奴王を意味する Hunastān, Hūnashāh の對音であらう。

とせられた。即ち氏は次の三ヶ條の理由から、白鳥博士が粟特國に關する眞傳とされる部分に疑問を懷き、その奄蔡についての記事なるべきことを主張されたのである。

(二) 「一名溫那沙」の句は「古之奄蔡」と「大澤に居り、康居の西北に在り」の兩句の間、即ち奄蔡關係の兩句の間にあつて、粟特國に直接續いてゐるのではないから、粟特・奄蔡何れの一名か決定出來ない、白鳥博士がこれを粟特の一名と斷定されたのは、なほ疑問の餘地がある。

(一) 「代を去る一萬六千里」は代と奄蔡國との距離と見れば頗る適當してゐるが、同じ魏書の西域傳に代・悉萬斤(サマルカンド)間の距離を一萬二千七百二十里、代・迷密(Maimarg [?])間の距離を一萬二千六百里としてゐるのを見れば、一萬六千里を代と中央アジアのソグディアナとの距離とは考へられない、

(三) 魏書・北史では匈奴とエフタル(嚙噠)とは常に明確に區別してゐる。従つて粟特國に侵入した匈奴はエフタルとは考へられない。

かくて江上氏は、

私は結果に於いてヒルト・白鳥兩博士の説を折衷した如き見解に到達した。即ち、粟特國は白鳥博士の言はれる如くソグディアナに相違ないが、その匈奴の記事はヒルトの主張の如くフンのアラン征服を中國側より傳へたものに間違ないといふ見解である。かくて魏書西域傳の粟特國の記事——實は奄蔡國の記事は、匈奴・フン同族論を文獻上より確證する唯一無二の貴重な史料と認めて殆ど不可なく、匈奴とフンの同族はもはや動かし難い史實と認むべきであらう。ここに於いて私は歷史上より觀たる匈奴・フン同族論、非同族論の長年に亙る論争も遂に同族論の勝利を以て、今日完全に終了したと考へるのである。

と斷定せられるに至つた。⁽⁸⁾

私はこれら諸先輩の研究に導かれつつ魏書の記事を再検討して見た。その結果、必ずしも從來の研究によつて總べてが悉されてゐるのではないことを知り、卑見の概要を發表したことがあるが、概要であるがために十分に意を盡すことが出来なかつた。そこでここに所見を詳述して同學諸氏の忌憚のない批評を受けたいと思ふ。

一

匈奴・フンの同族・非同族を決定する鍵として取上げられてゐるのは、魏書西域傳の粟特國の條である。そこでその内容を検討する前に、粟特國の傳が如何にして成立したかを考へて見よう。それには先づこの傳を含む魏書西域傳そのものが如何にして出来上つたかを考へて見る必要がある。

通行の魏書の西域傳は北史の西域傳を採つたもので、原本は夙に失はれてしまつた。そのことは現行の魏書西域傳の末に、魏收書亡、此卷全寫北史西域傳而不錄安國以後、案（殿本又）隋書西域傳云、康國大業中始遣使貢方物、後遂絕焉、此改大業字爲太延、蓋行（殿本後）人妄改（百柄本）による、とあるのによつて古くから知られてゐるが、現行の魏書西域傳を隋書西域傳に比較して見ると、右に指摘されてゐる康國の記事ばかりでなく、焉耆・龜茲・疏勤・干闥・嚙噠等の記事にも明かに隋書の記載であるべきものが少からず混入してゐることが認められる。これは隋書から北史に採られた記事が、北史に基いて魏書が復原せられた際に不注意にもそのまま引寫された結果に相違なく、現行の魏書西域傳が北史を鈔寫したものであることは、甚だ明かである。尤も北史西域傳にある高昌と條支との傳は魏書西域傳には入つてゐない。この中、高昌の傳は魏書の他の卷一〇にあるもので、北史編纂の時、更めて西域傳に入れたのを、魏書補錄に當つて省略したのであらう。次に北史にある條支の傳が魏書にないのは、「波斯國（中略）古條支國也」といふ記載が波斯の條にあるために故意に省いたのか、又は偶然の脱落によるのか、その何れかであらう。しかし條支の傳はその前にある安息の傳と關係し、その次にある大秦國の傳とも聯關があるもので、原本魏書にはあつたと考へねばならない。何れにしても、北史西域傳そのものが元來魏書・周書・隋書の西域傳を集成したものであるから、その中から北魏關係の記事を抜いて魏書西域傳を復原することは、手續としては十分に正しいものであつて、現行魏書の西域傳は、少くともその體裁に於いては、ほぼ原本魏書の面目を保つてゐると考へて差支へあるまい。しかし内容的には前述の如く、

周書や隋書の記載が混入してゐる場合が少くないのである。従つてその利用に當つては常に北史・周書・隋書との参照を怠つてはならないであらう。この場合注意すべきことは、隋書の西域傳が原本魏書西域傳を参照してゐる形迹がなく、全く獨自の史料に基いて編輯されてゐると考へられるのに對し、周書の西域傳は原本魏書西域傳を參考してゐる形迹のあることである。従つて現行魏書西域傳に周書西域傳と共通の部分があつても、それは必ずしも本來周書にのみあつて、原本魏書にはなかつたとは言へない。

それでは原本魏書西域傳は何時頃まで存在したか。そしてその北史による補修は何時頃行はれたか。これは魏書全體に互ることは勿論、宋・齊・梁・陳・周・北齊の六史の校定にも關係する問題であるので、考證の詳細は「魏書の補修について」と題する別の論文に譲るが、私の結論は次の如くである。

元來、魏收の魏書は魏收自身幾たびか補修改訂を加へたが、その後傳寫の間に多少改變を加へられた部分を生じた。所が北魏といふ時代に餘り興味がもたれなかつたことや、北史の出現などのために、魏書は唐代から五代宋初にかけて餘り行はれず、宋の慶曆元年（一〇四一）崇文總目の編纂せられた時には、宋政府所藏の魏書は百三十篇の中、九十餘篇を存するのみであり、更に宋・齊・梁・陳・周・北齊の六史についても多くの闕佚の存することが明かにせられたので、嘉祐六年（一〇六二）内外の異本を出来るだけ多く集めてこれら七史を校定し、出来る限り完全なテキストを作成し、これを印刷することになつた。魏書の校定は劉恕・劉攽・李燾・范祖禹がこれに當り、治平中（一〇六四—一〇六七）に完成を見た。魏書が今日見られるやうな形に纏められたのは全くこの時の校定の結果である。闕失不全の諸卷（校定者の記す所では三十篇）の補はれたのもこの時のことであるが、それは校定者が北史その他に基いて亡逸した諸卷や不全の個所を補つたのではなかつた。即ち校定に當つて集められた諸本に補修が既に行はれて居り、劉恕等はそれらを集成して百三十篇の舊に復すると同時に、そ

れら補修の部分については勿論、當時原本と信ぜられてゐた部分についても綿密な検討を加へ、その結果をそれぞれの卷末に注記し、更に目錄にも原書の闕逸を注した。前に引用した魏書西域傳の末の疏記は即ちこの時に施されたものと考へられる。やがてこの校定本に基いて板下が作られ、杭州に於いて開板せられ、學官に頒布せられた。現行の諸本はすべてこの時の刊本即ち監本魏書の系統を引くものであるが、校定者の加へた目錄への注記や卷末の疏記は、現行の諸本には完全には傳へられてゐない。即ち、魏書補修は嘉祐六年以前にいろいろな手によつて行はれたと考へられるが、その一々についてそれが何時、何人によつて行はれたかを決定すべき手がかりは、今日では得られないのである。西域傳についても同様であつて、その補修は嘉祐六年以前に何人かによつて北史を基として行はれたといふ以上には知られない。たゞ通典^三 九 奄蔡の條に

(奄蔡) 後魏時曰粟特國、一名溫那沙

とあるのに注して

後魏史云、初匈奴殺其王而有其國、至文成帝初、遣使朝貢、其王忽倪已三世矣

とあり、太平寰宇記^{六八}に

魏書西域傳曰、粟特一名溫那沙、古之奄蔡國、

とあるのは、共に魏收の魏書西域傳を引用したものであらうが、北史を引かず魏書を引いてゐることから考へると、何れも原本魏書に據つたものであらう。通典の上進されたは貞元十七年(八〇一)^四で、太平寰宇記の著者の歿したのは太中祥符元年(一〇〇八)であるから、魏書西域傳の原本の存在した年代は十世紀の末か十一世紀の初めまでは下すことが出来るであらう。但しこのことは必ずしも西域傳の補修がそれ以後行はれたことを意味するものではない。魏書校定の經過から考へても、

魏書には諸種の異本があり、或る本には缺けてゐる原篇が他にあつたり、或る本には補修が行はれてゐるのに、他では闕卷のままになつてゐたりした筈であつて、劉恕等の利用した補修西域傳は樂史以前のものであつたかも知れないのである。なほ太平興國二年（九七七）撰進の太平御覽の外夷部には北史西域傳と魏書西域傳とを引いてゐる。その魏書を引いてゐるのは記述が魏代に限られてゐるもので、御覽の編者も恐らく原本魏書西域傳を見てゐたであらう。しかし何れにしても、魏書・周書・隋書の記載を集成した北史西域傳も、周書・隋書も完全に現存するのであるから、これらを比較して原本魏書西域傳の面目を窺ふことは決して困難ではない。

さて、かうした前提のもとに現行の魏書西域傳を精讀して見ると、原本の魏書西域傳の構成が頗る明瞭に看取される。即ち、それは次の四種の材料から成つてゐるのである。

(一) 太延三年（四三七）西域に奉使した董琬・高明等の報告。

(二) それ以後入貢した西域諸國の使節の報告。

(三) 惠生の行紀。

(四) その他——西域經營に關する政府の記録等。

この中、西域傳の編纂に當つての基本的資料となつたのは（一）の董琬等の報告で、この報告を底本として、それに（二）以下の諸材料を加へて出來たのが、即ち原本の魏書西域傳である。

西域傳の序記によると、太延中、龜茲・疏勒・烏孫・悅般・渴槃陁・鄯善・焉耆・車師・粟特の九國から使節が來朝し、世祖太武帝はその答禮と魏の勢威の宣傳とのために、始め王恩生・許綱等を遣したが、途中蠕蠕に捕へられて使命を果さなかつたので、更めて董琬・高明等を派遣し、鄯善を通過してこれら九國を招撫せしめた。董琬等はこれら九國を過ぎ、更に

烏孫から破洛那・者舌に至り、その結果、烏孫・破洛那以下十六國が使を遣して董琬と與に入朝したといふ。これが魏と西域との組織的な通交の始まりである。魏書^上本紀によると、龜茲以下九國の使の入貢は太延三年（四三七）三月癸巳のことで、魏書西域傳烏孫國の條によると、董琬等のこの國に使したのは、同じく太延三年のことである。更に魏書^上本紀には太延三年十一月甲申にかけて、破洛那・者舌國が各々使を遣して朝獻し、汗血馬を奉つたことを記してゐるが、董琬等の歸還は恐らくこの時であらう。魏書^上本紀によると、太延四年（四三八）に鄯善、五年（四三九）に鄯善・龜茲・疏勒・焉耆が四月に、遮逸國が五月に入貢し、栗特・渴盤陁・破洛那・悉居半が十一月が入貢してゐる。これら計十一國の入貢は必ず董琬等招撫の結果に相違ない。従つて序記に十六國が董琬の歸國に隨つて入貢したといふのは誤である。この誤は次に記すやうに、董琬によつて報告された西域の國が十六あつたことから生じたものと思はれるが、董琬が果して實際に最初の九國を往訪したか否かについては、疑問がもたれてゐる。⁽¹³⁾

董琬等は西域から歸ると、その通過した諸國及び途上で傳聞した諸國についての報告を提出した。魏書西域傳の序記には次の如く記されてゐる。

始琬等使還京師、具言凡所經見及傳聞傍國、云、西域自漢武時五十餘國、後稍相并、至太延中爲十六國、分其地爲四域、自葱嶺以東、流沙以西爲一域、葱嶺以西、海曲以東爲一域、者舌以南、月氏以北爲一域、兩海之間、水澤以南爲一域、內諸小渠長、蓋以百數、

即ち董琬等の報告によると、太延三年（四三七）の奉使の際、實際に通過した國及びその存在について傳聞した國が合計十六あり、それらが四域に區分されてゐるといふのであつて、琬等の報告がこれら十六國についての記述であつたことは明かである。そして魏書の西域傳がこの董琬等の報告を主要な材料の一つとしてゐたことは、序記の末尾に

自琬所不傳而更有朝貢者、紀其名、不能具國俗也、其與前使所異者錄、

とあるのによつて察せられる。この意味は董琬等の報告に無い國でその後朝貢して來たものは、その國名を西域傳に記録するが、その國の風俗については詳述することが出来ない、しかし（琬等の報告にある國でも）前使即ち董琬等の報告と異つた情報のある場合には、これを記録したといふのである。（それは即ち前述の第二種の資料に當る。）

董琬等の報告した十六國は何々であるか。先づこの使節團の使命が同年入貢した龜茲・疏勒・烏孫・悅般・渴槃陁・鄯善・焉耆・車師・粟特九國の招撫であつたことを考へれば、十六國の中の九國がこれらの諸國であつたことは確かである。更に董琬等は烏孫から破洛那・者舌に至つたといふのであるから、これら二國も報告の中にあつた筈である。者舌の名は右の序記に引用された西域の四域について董琬等の記述の中にも見えてゐる。月氏も同じくそこに記されてゐるから、これ亦十六國の一つであつたに相違ない。又、後に記すやうに、「兩海之間、水澤以南、爲一域」といふのは大秦國のことに相違ないから、これも十六國の一つであつたであらう。これで十六國の中十三國の名が判明したのであるが、残りの三國は必ずしも明瞭でない。その中二つは太延五年（四三九）に入貢した遮逸と悉居半とであらう。悉居半は朱駒波・朱居・朱居槃なども傳へられ、今の Kargalik である。遮逸は

太延五年（四三九）五月癸未、遮逸國獻汗血馬（魏書四上）、

とあり、

太平眞君八年（四四七）十二月、鄯善遮逸國並遣子朝獻（魏書四下）、

とあり、

太和三年（四七九）十二月、粟特・州逸・河犂・疊伏羅・員闐・悉萬斤諸國各遣使朝貢（魏書七上）、

とあるもので、西域傳の中に專傳もなく、その何處を指したものであるか明かではないが、或は西域傳中の且彌國がこれに當るのかも知れない。

且彌國、都天山東于大谷、在車師北、去代一萬五百七十里、本役屬車師、

この國については松田壽男博士の詳考があるが、⁽¹⁴⁾それによると、この且彌國は漢書^{九六}西域傳^下の西且彌國で

西且彌國、王治天山東于大谷、去長安八千六百七十里、云々、

とあるものであり、且彌・代間の距離一萬五百七十里は漢代の西且彌・長安間の距離八千六百七十里に代・長安間の距離千九百里を加へて算出されたものである。更に松田博士は車師・疏勒・烏孫・粟特等、董琬の往訪した筈の國と代との距離として魏書西域傳に傳へられる所が漢書に記されてゐるこれらの諸國（粟特國の場合は奄蔡）と長安との距離に千九百里を加へて出来たものである事實を指摘し、この計算が董琬等によつて行はれたことを推定された。⁽¹⁵⁾従つて且彌國についての記事も董琬等の傳へる所と考へて差支へないであらう。但し遮逸（州逸）が實際ツルファン盆地から天山を越えた方面にあつた（西）且彌國であつたか、董琬等が名稱の類似から遮逸を且彌と決めてしまつたのか、は明かでない。烏孫（即ち後の突厥の阿史那氏）・悅般等天山山脉北方の諸國と北魏との交渉が太延三年から開始されてゐることは、この方面の諸國の魏への活潑な働きかけを思はしめるものである。従つて遮逸が漢代の且彌の後身で、太延五年以來魏に通じたとしても不思議はないであらう。要するに、遮逸が天山山脉北部にあつたか否かは明白でないけれども、董琬がこれを且彌に比定したらしいことは認めてよいやうである。先づかやうにして、十六國の中十五國はほぼ見當がついたけれども、最後の一國は依然不明である。私は當時の西域の形勢から考へて、或は波斯ではないかと疑つてゐる。魏書五本紀によると、波斯の入貢は太安元年（四五五）が最初のやうであるが、ササン朝ペルシヤの盛名は當然東トルキスタン方面にも轟いてゐた筈で、この國のことが董琬等の

耳に入らなかつた筈はない。況や董琬等はローマ帝國についての知識を有し、これを大秦として傳へてゐると考へられるので、その東隣にあつてこれと對抗してゐたペルシャのことを傳聞したことは十分あり得る。

董琬等が西域を四域に分ち、その十六國について報告したことは以上述べた通りであるが、その四域は具體的には今日の地理の何處に當るであらうか。

(一)「葱嶺以東、流沙以西、爲一域。」この第一域が今日のタリム盆地に當ることは極めて明かである。葱嶺はパミール、流沙は敦煌から鄯善に至る沙漠地帯である。それは魏書西域傳の鄯善國の條に太平眞君六年(四四五)の萬度歸の鄯善征伐を叙して、

度歸到敦煌、留輜重、以輕騎五千渡流沙至其境、

とあるのによつて知られる。なほ烏孫・悅般(・旦彌)等天山山脈北部の地域も、この第一域に含められてゐたのであらう。

(二)「葱嶺以西、海曲以東、爲一域。」この第二域は、ソグディアナ地方から地中海の東海岸に至る地域で、ソグディアナ・ペルシャ等を含んでゐる。葱嶺はパミールに相違ないが、この場合はパミールとその西に連るタデキスタン山地一帯を汎稱したものと解すべきであらう。白鳥博士はこの葱嶺をヒンドウクシュ山脈と看倣し、魏書西域傳に

安息國在葱嶺西、都尉搜城、西與波斯接、在大月氏西北、

とあり、

漕國在葱嶺之北、漢時屬賓國也、

とあるのを以て、ヒンドウクシュ山脈が葱嶺と呼ばれた證であるとせられた。博士によると安息はメルフ(Merv)方面、漕國はヒンドウクシュ山脈の南のカピサ(Kapisa)であつて、漕國が葱嶺の北にあるといふのは南の誤であるといふ。私

は漕國は漕矩吒 (Zaguda, Zābū) の略稱で今日のガズナ (Ghazna) に當り、通説の如くカピサに當つべきではないと考へるが、それは何れにしても右の漕國の記事は隋書にあるもので、魏書とは關係がない。しかし南北朝時代から唐代にかけてはバミール及びそれに隣接する山系はすべて葱嶺の名を以て呼ばれてゐた。即ち、隋書西域傳には右の漕國の記事の他に「女國在葱嶺之南」、「干闥國都葱嶺之北」、「鍛汗 (Fergana) 國都葱嶺之西五百餘里」とあり、唐書^{二二}には「罽賓 (Kāpiśa) 隋漕國也、居葱嶺南」とあり、西域記^二に「葱嶺者據瞻部洲中、南接大雪山 (Hindukush)、北至熱海 (Issik-kul) 千泉 (Aulie-ata)、西至活國 (Ghur)、東至烏鐵國、東西南北、各數千里」とある。西域記^一には今のウチュ＝トルファン (Uch-turfan) から熱海に至る途中のベデル (Bedel) 峠即ち凌山を「此則葱嶺北原」とし、シル河の源を葱嶺の北原にありとしてゐる。白鳥博士の擧げられた安息國の場合も確かにヒンドウークシヨ山脈が葱嶺呼ばれた一例であるが、右の諸例が示すやうに、葱嶺はバミールを中心とする諸山系の總稱で、ヒンドウークシヨ山脈もその一部をなす場合があつたと解すべきであらう。従つて、董琬等の報告の所謂第二域の葱嶺もこの廣義の葱嶺の意味に解釋すべきであつて、ヒンドウークシヨにのみ限るべきでない。

第二域の西境をなす海曲については、いろいろと難しい議論があるが、それは魏書西域傳の大秦國の條に

大秦國^(中)從條支西、渡海曲一萬里、

とあるのに當り、シリヤ・パレスチナ等地中海の東海岸から小アジア・ギリシヤを経てアドリヤ海に及ぶ海岸及び海域を汎稱したもの⁽¹⁷⁾と解すべきであらう。海曲の名はシリヤ・パレスチナから小アジアを経てイタリア半島に至る海岸が曲形をなしてゐると理解されてゐたことから生じたものであらう。これについては、第四域の説明に於いて觸れるから、今は深く論じ

ない。

(三)「者古以南、月氏以北、爲一域」。者古は Shaah, Chach と今日のタシュケンド (Tashkend)、月氏はアフガニスタン北半からガンダーラ等西北インドの一部を領有してゐたクシャン (Kushan) である。即ち、第三域はターシュケンドからアフガニスタンの北半及びガンダーラに及ぶ地域で、内容的には前に述べた廣義の葱嶺の西部を含むものである。白鳥博士はこの第三域を解して、「大體に於いて Sogiana と Bactria と見れば大過はない」と言はれてゐるが、ソグディアナは實に第二域に屬すべきであつて、第三域には入らない。その理由は、「粟特國在葱嶺之西」と明記されてゐるからである。このことについては、また後に述べる。

(四)「兩海之間、水澤以南、爲一域」。ここに「兩海之間」といふのは、魏書西域傳大秦國の條に、

大秦國(中)居兩海之間、

とあるもので、具體的には大秦國のことに他ならない。何故に大秦國が兩海の間に在りと言はれたかに就いては、これまたいろいろと難しい議論があるが、私はこれはイタリヤ半島が地中海を東西に兩分してゐる形勢を述べたものであると解したい。「水澤以南」の水澤は、粟特國の條に「居於大澤」とある大澤に相違ない。漢代から北魏時代に至るまでの支那人はアル海・カスピ海・黒海の區別を知らず、アル海が西方乃至北方に無限に擴つてゐるものと考へてゐた。⁽²⁰⁾ 史記 三二 大宛傳(漢書九六 西域傳)に

奄蔡(中)略臨大澤、無崖、蓋乃北海云、

とあるのはその一例で、この大澤が北氷洋に連續してゐると考へられてゐたことを示すものである。又、後漢書八一 西域傳に

延光二年（一二三）敦煌太守張璠上言陳三策、以爲、北虜呼衍王常居蒲類（Barkul-nor）秦海之間、專制西域、共爲寇鈔、

とある秦海は明かにアラル海を指してゐるが、秦海の名はこの海が大秦國にまで續いてゐるといふ考へ方に基いてつけられたものに相違ない。⁽²⁾董琬等の「水澤以南」も全くこれらと同じく、この水澤が遠く北方と西方とに擴つてゐ、以北には陸地がなく、その南方に陸地があると理解してゐたことを示すものである。魏書には大秦國について

大秦國^(中)從條支西、渡海曲一萬里、去代三萬九千四百里、其海傍^(北史)出、猶渤海也、而東西與渤海相望、蓋自然之理、地方六千里、居兩海之間、^(中)從安息西界循海曲、亦至大秦、四萬餘里、

と記してゐる。「其海傍出、猶渤海也」といふのは海が陸地に深く灣入してゐること、宛も支那の渤海（灣）の如くであるといふ意味で、イタリア半島・ギリシヤ・小アジア・シリヤ・パレスチナに圍まれてゐる地中海が、その形狀支那の渤海（灣）に似てゐることを言つたのに相違ない。「而東西與渤海相望、蓋自然之理」の文句は、古くヴィスドル（Vissdelou）の解したやうに、支那の渤海と大秦の渤海とが東西に存することは、蓋し自然の理であるとするのが穩當のやうである。私は支那古文の語法に暗いけれども、「而東西與渤海相望」といふのは「而東渤海與西渤海相望」を省略簡化した表現ではあるまいか。白鳥博士はこれを「東方の條支國と西方の大秦國とが共に此の渤海に臨んでゐる」と解釋し、この渤海は海曲と同じで、ペルシヤ灣と紅海とがアラビヤの地に深く進入して一つ的大海灣を爲してゐたと信ぜられたもので、その西に大秦國、その東に條支國があつたと考へられてゐたのだとせられた。⁽³⁾又、博士は兩海は地中海とこの海曲であると説き、大秦國を飽くまで地中海東岸の所謂ローマン＝オリエントに比定しようとせられるのであるが、魏書の大秦傳を平心に讀むと、私の解釋の方が自然のやうに思はれる。魏書の大秦傳には大秦に至る水道と陸道の二つが示してある。水道は條支から西行し、海曲を

渡るもの、陸道は安息の西界から海曲に傍つて行くものである。その何れも目指してゐる所はイタリア半島である。

要するに、「兩海之間」は大秦國である。そして水澤がアラル海の西方及び北方への無限の延長であるとする、「水澤以南」といふのは、この水澤の南方にあつた地域、即ち小アジア・ギリシヤ等の地方に當ることになる。この地域が西に無限に連續してゐたと考へられてゐたか、或ひは鍵の手に南に折れ曲つてイタリア半島に接續してゐると考へられてゐたか。それは不明である。又、今の魏書の大秦傳が董琬等の報告その儘か、或ひは董琬等の報告に増補が加へられたものか、これ亦明瞭を缺いてゐる。しかし董琬等が海曲とか兩海之間とかに言及してゐる以上、元來大秦國について海曲や兩海之間に關する記述があつたことは甚だ確かである。大秦傳の文章が首尾一貫してゐる所を見ると、その大部分は董琬等の報告にあつたものであらう。⁽²⁴⁾

董琬等の報告に見える西域の四域を現行の魏書の西域傳に比較して見ると、後者の記述がこの四域の順序に従つて行はれてゐることが明瞭に知られる。今、魏書西域傳に收められた國名を列記し、董琬の報告に入つてゐたと思はれるものをゴデック體で示して見る。(※印は本紀の中にこれと同じ譯名で入貢を記録されてゐるもの。)

- | | | | | | | |
|---|---|-----|----|---|-----|-----------------------------|
| 1 | ※ | 鄯善 | 6a | ※ | 渴槃陀 | (北史にも現行魏書にもないが、原本魏書にはあつた筈。) |
| 2 | | 且末 | 7 | | 渠沙 | |
| 3 | ※ | 千闐 | 8 | ※ | 車師 | |
| 4 | | 蒲山 | 9 | | 且彌 | (遮逸? 州逸?) |
| 5 | ※ | 悉居半 | 10 | ※ | 焉耆 | |
| 6 | | 權於摩 | 11 | ※ | 龜茲 | |

- 12 姑墨
13 溫宿
14 尉頭
15[※] 烏孫
16[※] 疏勒
17[※] 悅般
18 者至拔
19[※] 迷密
20[※] 悉萬斤
21[※] 忸密
22[※] (破)洛那(以上第一域)
23[※] 粟特國在葱嶺之西
24[※] 波斯(?)
25 伏盧尼
26 色知顯
27 伽色尼
28[※] 薄知
29 牟知
30 阿弗太汗
31 呼似密
32 諸色波羅
33 早伽至
34 伽不單(以上第二域)
35[※] 者舌
36 伽倍
37 折薛莫孫
38 鉗敦
39 弗敵沙
40 閭浮調
41 大月氏(以上第三域)
42 安息
42 a (條支) (北史にはあるが現行の魏書にはない。²⁴⁾
43 大秦(以上第四域)
44 阿鈎羌

45 波路

46 小月氏

47※ 颯賓

48※ 吐呼羅

49 副貨

50※ 南天竺

51※ 疊伏羅

52 拔豆

53※ 嚧噠

この中、6a渴槃陀は董琬の報告にはあつた筈であるが、恐らく魏書編輯の際（或は北史編輯の際）55と重複するので省略せられたのであり、5悉居半と54朱居、46小月氏と60乾陀とは、何れも同一國であるが、譯名が異つてゐるので、共に採録されたのであらう。又、22洛那（Faghana）が葱嶺の東にあるべき第一域に入るのは不思議に見えるが、董琬等は第一域に入るべき國として扱つたのである。

右の表に示した如く、54朱居から60乾陀までは慧生の行紀（私の所謂資料第三種）の記事を採録したものである。北史及び現行魏書の西域傳には、共に嚧噠傳の末尾に、

初熙平中（五一六—五一八）、肅宗遣魏書王伏子統宋雲沙門法力等使西域、訪求佛經、時有沙門慧生者、亦與俱行、正光

中（五二〇—五二五）還、慧生所經諸國、不能知其本末及山川里數、蓋舉其略云、其國去漕國千五百里、去瓜州六千五百里、

54 朱居

55※ 渴槃陀

56 鉢和

57 波知

58 賒彌

59※ 烏菴

60 乾陀

61 康國（原本魏書にはなかつた筈）

慧生の行紀

とある。この中「其國去漕國千五百里、云々」は隋書の怛怛（即ち嚙噠）の傳の記事を取つたもので、嚙噠傳に入れて然るべきものであるが、他は嚙噠傳とは別の記事で、54 朱居以下七國の記事を慧生の行傳から採録したことについての序記である。従つてこの記事は嚙噠傳とは切り離し、別行にして朱居國の前に置くべきである。慧生の行傳の拔萃を西域傳に加へたのは、北史編輯の時であるかも知れないが、姑く魏書に本來あつたものと考へて置く。

この表によつて、魏書の西域傳が董琬等の報告を基礎にし、その報告にない諸國の記事を適當と思はれた箇所に挿入して編成されたものであることが容易に知られたであらう。但しその挿入が必ずしもすべて正しくは行はれなかつたことも、また甚だ明かである。例へば 20 悉萬斤 (Samarqand) や 21 忸密 (Nimichkath. in Bukhara) 49 副貨 (Bukhara?) は當然第二域に挿入さるべきであるし、28 薄知 (Bakhti, Balkh) や 46 小月氏・48 吐呼羅 (Tokhara) 51 疊伏羅 (Zabula, Ghazna) などは第三域に入るべきであらう。しかしかうした挿入の際の不手際は、却つてその挿入が董琬等の奉使以後の知識に基いてゐることを明示するもので、我等後の研究家に西域についての北魏時代の知見の發展を述べけるよき手がかりを與へる。例へば 45 波路 (Bolor) が 44 大秦以後に置かれてゐるのは、それが董琬等の報告にはなかつた明證で、現行魏書西域傳の序記に、西域の四區分に續けて、

其出西域、本有二道、後更爲四、(中略)葱嶺西南一千三百里、至波路爲一道焉、

といふ西域の交通路に關する記事も董琬の報告にはなく、その後の記述に基いてゐることが推察せられる。53 嚙噠 (Hephthal) についての記事も、同様にして董琬以後のもので、太延三年 (四三七) 董琬が西域に使した時は、なほ嚙噠について聞く所がなかつたのである。(これは嚙噠勃興の年代を暗示する重要な事實である。)

(三)

以上長々と現行魏書の西域傳がほぼ原本の體裁を保つてゐることと、原本魏書の西域傳が董琬等の報告をもとして編輯されたことを述べた。これは現行魏書西域傳の粟特國關係の記事を批判する一つの豫備工作としてである。

さて粟特國のことが董琬等の報告に傳へられてゐたこと、更にそれが「葱嶺以西、海曲以東」といふ西域の第二域に入れられてゐたことは、以上述べた如くであるが、それでは現行魏書の粟特國傳のすべてが董琬等の報告に記されてゐたかといふと、さうではない。董琬は太延三年（四三七）三月癸未入貢の九國を招撫するために同じ年に出發し、同年十一月甲申洛那・者舌の二國が入貢した時に歸還してゐたと思はれるから、報告の提出は歸還と同時に、それから間もなくのことであらう。所が粟特國傳には

其國商人、先多詣涼土販貨、及克姑藏、悉見虜、高宗初、粟特王遣使、請贖之、許聽焉、自後無使朝獻、

とある。姑藏の沮渠牧犍の降伏は太延五年（四三九）九月のことであり、高宗朝に於ける粟特國の入貢は太安三年（四五七）正月戊辰のことであるから、少くとも右の記事が董琬等の報告以後に屬するのは明かであらう。

さて問題はこの粟特國が中央アジア（ウズベキスタン）のソグディアナ（Sogdiana）か、クリミヤ半島のスグダイア（Sugdaea, Sugdaia, Sudak, Soldaia）かといふことである。ヒルトはこの粟特が奄蔡であると記されてゐることから後説を取り、白鳥博士は中央アジアのソグディアナが後漢・三國・晉代を通じて粟弋・粟特・屬繇の名で支那に知られてゐたことと、奄蔡はこれと全然別地で兩者を同一視することは許されないといふ見地から、前説を採られてゐることは、第一章に述べた通りである。私は白鳥博士の結論を正しいと考へる。その理由は次の如くである。

(一)董琬等の報告に粟特國を葱嶺以西の國の第一に列してゐる。葱嶺はパミールを中心とする山系の總稱であつて、その西に位するとせられた粟特國は中央アジアのソグディアナとして始めて理解せられるが、到底クリミヤ半島のやうな遠隔の地に置くことは許されない。クリミヤ半島を含む南露の地方はウラル山脈の西南方にあり、極めて大まかに言へば葱嶺の西にあると言へないことはあるまいけれど、董琬等は水澤即ちアラル海が北と西とに無限に擴つてゐたと考へてゐたのであつて、南露地方の存在を認めてゐないのである。假にこの粟特が南露方面にあつたとすれば、粟特に始まる「嶺葱以西、海曲以東」といふ一域は、南露とシリヤ・パレスチナ方面とを含む地域になり、第四域の「兩海之間、水澤以南」と大部分重つてしまふことになる。

(二)白鳥博士の考證せられたやうに、中央アジアのソグディアナは粟弋・粟特・屬繇の名で後漢書・魏略(山海經下、海經第十内東²⁵)・晉書に傳へられてゐる。更に宋書文帝紀には

元嘉十八年(四四一)、是歲肅特國高麗國蘇靡黎國林邑國竝遣使獻方物、
とあり、同じく宋書五九索虜傳の末に

渡流沙萬里、又有粟特國、太祖(文帝)世竝奉表貢獻、粟特、大明中(四五七—四六四)遣使獻獅子火浣布汗血馬、道中遇寇失之、

とある。この肅特・粟特は共に Sugdika などの對音でソグディアナを指すこと甚だ瞭かであるが、それが獅子を奉獻しようとしたことはこれが中央アジアのソグディアナであつたことを有力に物語るものと思はれる。獅子はソグディアナの特産ではないけれども、ソグディアナの獅子は特に名高いものであつた。⁽²⁶⁾魏書西域傳にも悉萬斤國(Samarqand)が獅子を出すことを記し、魏書十本紀には建義三年(五三〇)六月に繋けて、西域傳には正光(五二〇—五二五)の末に繋けて嚙嚙國が師子を獻

じたことを傳へてゐる。嚙噠の師子は恐らくその領土の一部をなしたソグディアナ産のものであらう。唐書^{二二}唐國の條には唐の太宗の時康國が師子を獻じて虞世南が賦を作つたことを傳へ、更に降つて明代に於いても、ヘラット(Herat)、サマルカンド産の獅子が貢獻せられて時人の視聽を聳した。明代の記録によると、これらの獅子はアム河の流域に産し、子獅子を捕獲してこれを訓練したといふことである。⁽²⁸⁾かくの如く、宋書に見える肅特國・粟特國が中央アジアのソグディアナであることを考へると、同じ時代に北魏に朝貢した粟特國も亦中央アジアのソグディアナであつたと信ぜられる。

(三) 粟特國と奄蔡とは別國であつて混同すべきでない。これ亦白鳥博士の論ぜられた通りである。魏書の粟特國傳には、

粟特國在葱嶺之西、古之奄蔡、一名溫那沙、居於大澤、在康居西北、去代一萬六千里、

とある。通行の北史には「故名奄蔡」とあり、周書^五十には

粟特國在葱嶺之西、蓋古之奄蔡、一名溫那沙、治於大澤、在康居西北、

とある。次に記すやうに、私は周書のこの記事は原本魏書西域傳の記事を節略したものであると考へるのであるが、「古之奄蔡」、「故名奄蔡」、「蓋古之奄蔡」といふ文面からも明かなやうに、粟特と奄蔡との結びつけは推定に基くもので、奄蔡といふ國が當時現實に存在し、それが粟特とも呼ばれてゐたためではない。粟特國傳中の奄蔡に關する記事は、史記^{一二}三・漢書^{九六}上六に

奄蔡、在康居西北、可二千里、與康居同俗、控弦者十餘萬、臨大澤、無崖、蓋乃北海云、

とあるのに依つたもので、漢代の奄蔡に關するものである。粟特國傳に所謂「去代一萬六千里」といふ數字も、既に松田博士の論ぜられたやうに、漢書に記された長安と康居との距離一萬二千三百里に、康居と奄蔡との距離二千里及び長安と代との距離一千九百里を加へた一萬六千二百里の概數を擧げたものであらう。⁽¹⁵⁾かうした距離の算出の仕方は董琬等の報告の他の

部分にも多く見られる所であるから、粟特國と奄蔡とを結びつけたのは董琬等であると考へて誤あるまい。その結びつけが水澤の位置をはつきりさせる必要から、粟特の一名溫那沙と奄蔡との音の類似に基いて行はれたのであらうことは、本文の末に述べる如くであつて、私が周書の粟特國傳は魏書のそれを節略したものであらうと言つたのは、このためである。

奄蔡は康居即ちシル河以北のキルギス草原の西北で大澤に臨む所にあつたのであるから、それがアラル海・カスピ海等の北の方に位置してゐたことは明かである。奄蔡の原音については、或はこれを Aorsi とし、Abzoe とし、Kipchak とするなど定説がない。⁽³⁹⁾ 奄蔡は後漢代に名を阿蘭と改め、三國時代には魏略西戎傳に「又有奄蔡國、一名阿蘭」とあつて、奄蔡・阿蘭の兩名が行はれた。これは白鳥博士の推定せられたやうに奄蔡がアラン (Alan) 民族に征服せられた結果であらう。⁽⁴⁰⁾ アミアヌス＝マルケリヌス (Amm. Marcellinus, XXXI, 2, 13) に「打續く勝利によつて彼等 (アラン) はその出遭つた諸民族を征服し、ペルシャ人がしたのと同様に、これら諸民族を彼等 (アラン) 自身の國家的名稱 (即ちアラン) の名のもとに包括した」とあるのは、この間の消息を物語るものである。テガート氏 (F. J. Teggart, China and Rome, Berkeley, 1939, pp. 200 ff.) は奄蔡を Abzoe と見、そのアランと呼ばれたのは Abzoe-Alan の國家聯合が出来たためだとされたが、實際はさうした平和的共存關係でなく、一方が他方を征服した結果と見るべきであらう。

魏略には柳國・巖國・奄蔡國 (阿蘭) 等ヴォルガ河流域方面に據つた諸國の名が見え、カスピ河北岸地方の情況が或る程度支那人に知られてゐたやうであるが、⁽⁴¹⁾ その後、隋代に恩屈・阿蘭・北褥九離・伏囄昏等この方面の民族のことが知られるまで、⁽⁴²⁾ 南路方面の地理は全く支那人に理解されてゐなかつた。それは董琬等の西域の地理の區分によつても知られるが、三國時代以後隋代以前奄蔡・阿蘭等の名が現實に存在する國又は民族の名稱として、絶えて用ひられてゐないことによつても判る。ただ魏書一〇吐谷渾傳の末に、阿蘭國の名が見えてゐる。

吐谷渾北有乙弗勿敵國、(中略)北又有阿蘭國、與鳥獸同、不知鬪戰、忽見異人、舉國便走、土無所出、大養群畜、體輕工走、逐之不可得、

所がこれに相應する北史六九にはこれを可蘭と書き、白蘭山の西北にあつた國としてゐる。

吐谷渾北有乙弗勿敵國、(中略)白蘭山西北、又有可蘭國、風俗亦同、目不識五色、耳聞五聲、是夷蠻戎狄之中醜類也、土無所出、直大養群畜、而戶落亦可萬餘人、頑弱不知鬪戰、忽見異人、舉國便走、性如野獸、體輕工走、逐不可得、

魏書卷一〇一は原書が亡失したと言はれてゐる卷の一つであるが、或は現行の魏書は北史を鈔出したものかも知れない。何れにしてもこの場合は北史の記載がより詳しく、より正確である。この國のことは劉宋の段國の沙州記にも見え、それは可蘭に作つてゐる。(註)この阿蘭・可蘭はAlan, Halan(註)と酷似した名稱であるが、カウカサスの北方に據つたアラン民族とは何等の關係もない白蘭山(Burkhan Buddha)(註)の北方にゐた原始的な民族のやうである。奄蔡の名は元代に至つて再び現はれる。耶律鑄の雙溪醉隱集六(知服齋叢書本)の行帳八珍并序に麇沆を説明して、

麇沆馬飼也、漢有桐馬、注曰、以草革爲夾兜、盛馬乳桐治之、味酢可飲、以爲官、又禮樂志、大官桐馬酒、注以馬乳爲酒、言桐之味酢、則不然、愈桐治則味愈甘、桐逾萬杵、香味醇濃甘美、謂之麇沆、麇沆奄蔡語也、國朝因之、と述べ、更にこれに注して、

奄蔡、西漢西域傳無音、大宛傳宛王昧蔡、師古曰、蔡千葛切、書二百里蔡、毛晃韻蔡桑葛切、廣韻亦然、奄蔡蔡千葛切爲是、今有其種、率皆以從事桐焉、

とあるのがそれである。李文田の箋によると、

文田案、雙溪以奄蔡二字爲欽察之本字也、元史西北地附錄有欽察國、雙溪引漢書西域傳注、以蔡音察、蓋以欽察卽奄蔡

二字之對音、

と云ふ。麿沅 (ts'u-hang) は馬乳酒 (クミス) を意味する蒙古語 ts'gen, chigän (Ramstedt, Kalmükisches Wörterbuch, S. 43 b) の對音である。⁽⁸⁵⁾ 耶律鑄は奄蔡の種人が當時なほ存して馬乳酒の製造に従事してゐたと言つてゐるが、それは李文田の推察の如く、欽察人などを奄蔡の後裔と看做してのこと、當時實際奄蔡といふ民族がゐたのではない。それは耶律鑄が奄蔡の音について漢書西域傳を参照してゐるので明かである。彼が何故に麿沅を奄蔡語としたのか、又馬乳酒の製造を奄蔡に起源すると考へたのか判らないけれども、とにかくこれは耶律鑄の一種の archaism に他ならないであらう。要するに、奄蔡は兩漢三國には實際この名で存在したけれども、それ以後は絶えてしまつた名である。もしこれが Kipchak の音譯であるとしても、その名が再び現れるのは元代である。⁽⁸⁶⁾

董琬等の奉使した四三七年から約三十年後の四六一—四六五年の頃サラグル (Saraghur) オグル (Oglur) オノグル (Onoghur) の三民族がローマ人の所に使節を派遣して、東方の大洋の沿岸に住む人々の東方移動に端を發した民族移動の結果、アヴァール (Avar) 民族が先づより東方に移動を餘儀なくせられ、アヴァールはサビール (Sabir) 民族を東方に壓迫し、サビールはサラグルを東に押遣つたので、サビールは移住地を求めてフン族 (スキタイ族ともいふ) のアカツヂール (Akatzir) を征服してその地に據り、ローマ人の所に同盟を求めて來たといふことがプリスクスに見えてゐる。⁽⁸⁷⁾ プリスクスによるとアカツヂール人は黒海の北に據つてゐたといふことである。ここに出て來るいくつかの民族の住地やその人種について考へるべきことが頗る多いが、今の問題に必要なことは、奄蔡に類似した國名乃至は民族名が出てゐない點である。アランの名はプリスクス以前の西方記録にも、これ以後のものにも出てゐるが、奄蔡の名は三國以後の支那記録には出て來ない。⁽⁸⁸⁾ これは三國時代から以後、奄蔡又はそれに類似した名で注意すべき活躍を行つた國又は民族がなかつたことを示すものであ

らう。

太平寰宇記^{一八} 粟特國の條に、

十三州志云、「奄蔡粟特各有君長」、而魏收以爲一國謬也、

と言つてゐる。これは十三州志の文を引いて太平寰宇記の著者が魏書西域傳に粟特と奄蔡とを同一視してゐるのを非難したものである。十三州志は闐駝の著である。闐駝は敦煌の人で、初め沮渠牧犍に仕へ重用せられ、沮渠氏が太延五年（四三九）北魏に降つてからは、涼州に鎮した平樂王丕の從事となり、丕の歿後、代に移つて貧窮の中に卒したといふ。³⁹張澍の輯本によると、右の十三州志の文は太平御覽に出てゐるとあるが、太平御覽にはさうした引用文は見當らない。恐らく太平寰宇記の誤であらう。それは何れにしても、十三州志の右の文章は當時奄蔡といふ國が實際存したのではないかと思はせるものがある。闐駝は何故に奄蔡と粟特とに各々君長があることを特記したのであらうか。何分にも前後の文章が傳へられてゐないので推察する他はないが、私は闐駝が何等かの機會に董琬等の報告を見、その粟特と奄蔡とを同一視してゐるのを讀んで、暗にその然るべからざることを諷したのではないかと考へる。従つて右の十三州志の記事は必ずしも奄蔡が紀元五世紀の前半に實在してゐたことを物語るものではないであらう。

(四) 魏書の粟特國が中央アジアのソグディアナで、クリミヤ半島のそれではなかつたことは、兩者の商業活動の歴史からも考へられる。中央アジアのソグディアナ人の商業活動は古來有名である。粟特の名が後漢の頃から支那の記録に現れることは、少くともこの頃からソグド商人の支那への通商活動が始められてゐたことを示すものであるが、實際はもつともつと古くからであつたらう。五胡十六國時代には彼等の多くが河西地方に來住してゐたのであつて、スタインが敦煌から採集したソグド語の書簡はよくこの事實を物語つてゐる。⁴⁰これは魏書の粟特國傳に粟特國の商人が多く涼土即ち河西地方に來て商業活動

に従事してゐたとある記事に吻合する。魏書によると、これら粟特國の商人等は沮渠氏の滅亡（四三九）と同時に魏の捕虜となつたが、高宗の時、粟特國王がこれを贖つたといふ。高宗朝に於ける粟特國の入貢は太安三年（四五七）正月一回限りである。従つて捕虜の贖還の要請の行はれたのもこの時であらうが、粟特國はこれ以前太平眞君五年（四四四）十二月にも入貢してゐるのであるから、何故に十八年も後の太安三年に要請が行はれたのか、思へば不思議なことである。又、粟特國の商人を北魏が捕虜にした事情も明かでない。恐らくは奴隸⁽⁴⁰⁾或ひは北魏の西域經營とか國際貿易とかの事務員として強制的に留用したのであらう。更に太安三年の入貢以後、粟特國の朝獻が絶えたといふのは誤で、魏書本紀に著録されてゐるのだから、皇興元年（四六七）延興四年（四七四）太和三年（四七九）の入貢が數へられる。

これに對し、クリミヤのスグダイア・スダックの名はプロコピウス（Procopius）以前には現はれない⁽⁴¹⁾。プロコピウスは五世紀の末乃至は六世紀の始めに生れ、その歿年は明かでないが、五六〇年代まで活動を續けた人である⁽⁴²⁾。しかし、この地がデエノア人を中心とする國際貿易場として東西に喧傳されるのは、十一・十二世紀以後のことに過ぎない⁽⁴³⁾。假にクリミヤが太延三年（四三七）頃既に黒海沿岸地域に於ける商業活動の一大中心となつてゐたとしても、果してその商人が涼州にまで進出してゐたか否か、頗る疑はしいと言はねばならぬ。

(五) 魏書には匈奴の粟特國征服を傳へてゐる。この記事が匈奴・フン同族論者に最も重要な論據として利用せられて來たことは、第一章に記した通りである。

先是匈奴殺其王而有其國、至王忽倪已三世矣、

ヒルト氏等はこれを以てフンのアラン征服を傳へたものとし、忽倪をアッチラの長子エラック（Ellac）又は末子ヘルナック（Hernac, Ernac）に擬した。

一體この記事は董琬等の報告にあつたものか、又は太安三年（四五七）粟特王がソグド商人の贖還を請うた時に得られたものか、それともその前後に於ける粟特國人貢の際得られたものであらうか。アッチラの死んだのは四五三年のことであるから、その子ヘラック・エルナック等がアッチラの遺衆を分領したのはこの年以後のことである。もし忽倪がヘラックかエルナックかに當るのであれば、この記事は董琬以後に得られた知識でなければならぬ。またもしこの記事は太延三年（四三七）の董琬等の奉使の報告に既にあつたとすれば、忽倪はヘラックでもエルナックでもあり得ない。私は粟特の一名溫那沙は董琬等の報告の中にあり、この名のために粟特と奄蔡とが結びつけられたと考へ、更に溫那沙の溫那を、後に記すやうに匈奴の別譯と考へる所から、匈奴による征服の記事は董琬の報告の中に既にあつたと信ずる者である。従つて忽倪はアッチラの子に擬し得ないとするのであるが、フンの歴史そのものから考へてもヒルトの比定は成立しないやうに思ふ。

先づフンのアラン族征服の確實な年代は明かでないが、紀元三七〇年の後間もなくフンとアランとの聯合軍がオストロゴット王國を攻めてゐるから、三七〇年かそれより以前のことと相違ない。ヒルトは

忽倪なる匈奴の粟特國王が北魏の高宗の初め―漢西域圖考の著者（李光廷）によれば太安初（西曆四五五年乃至同四五七年頃）―に中國に遣使した時より溯つて三世代前―その間約百年と推算して、西曆三五五年頃に、匈奴が奄蔡（アラン）を征服したといふ支那側所傳は、フンのアラン征服に關する西方の史實に完全に照應する。

といふ。匈奴の奄蔡（アラン）征服が三五五年に當ることは、フンのアラン征服が三七〇年かそれ以前にある事實と抵觸しないことは確かであるし、三世を約百年又は九十年と計算することも必ずしも不都合ではない。しかし「至王忽倪已三矣」といふのは、粟特國の征服を完成した第一代の匈奴王から數へて忽倪が三代目か四代目に當るといふ意味である。一體フンの王で名の判つてゐる最初は、四〇〇年から四〇八年までロトマ領に侵入したウルヂス（Uldis）で、ウルヂスの名は四〇

八年以後再び現はれないけれども、ウルヂス以後フンの王位が漸く制度化されるやうになつた。尤もこの頃のフン族は全體としての統一がなく、多くの部族に分れ、王又は酋長はそれら個々の部族又は幾つかの部族を支配するに過ぎなかつた。四一二年、オリムピオドルス (Olympiodorus) がフン族を訪れた時、フン王ドナーテス (Donates) が暗殺されると、直ちにハラト (Charato) が後斷者に任命せられた。ハラトの後には四一五一四二〇年頃かそれより少し後にペルシャに侵入したバシッフ (Basich) クルシッフ (Cursich) の二王の名が傳へられてゐる。四二〇年代の後半に至つてルア (Rua) といふフン王が出で、その兄弟のムンドウィッフ (Mundwich) 及びオクタ (Octar) と共に、フン部族の空前の大聯合を形造つた。ルア兄弟の父や先祖が誰であつたかは傳へられてゐないし、彼等とバシッフ・クルシッフとの關係の有無も何等知られてゐない。ルアの兄弟は死に、四三二年ルアがこの部族聯合の唯一の支配者になつた。ルアは四三四年に歿し、その二人の甥が繼いだ。長がブレダ (Bleda)、次がアッチラ (Attila) である。四四五年アッチラはブレダを殺し、以後四五三年に死ぬまで彼は全フン族の最高の権力者として振舞つたのである。アッチラの歿後その屬民はアッチラの子供達に等分に分與されたが、彼等は間もなく互に争ひ始め、屬民の間に離叛の色が濃くなつた。四五五年頃、アルダリック (Ardaric) に率ゐられたゲルマン族の叛軍はフン族とその同盟軍とをバノンニヤのネダオ (Nedao) 河に完敗せしめた。エラックは戦歿し、他の兄弟は遺つた部下を引具してカルパチャ山脈を越えて逃れ、黒海の沿岸に退避した。^(補註) その後のフンの動靜は明かでないが、トムプスン (E. A. Thompson) 氏の推測によると、エルナックは東ローマ帝國の一傭兵として世を終へたらしいといふ。

以上はトムプスン氏の「アッチラとフンとの歴史」(A History of Attila and the Huns, Oxford 1948, pp. 29, 59, 30—31, 60, 63, 72—73, 88—89, 152, 153) に基くフン族史の概要であるが、これによるとエラック・エルナックの一代前は彼等の父アッチラと伯父ブレダとの世代であり、二代前はアッチラ兄弟の伯父(叔父?)ルア・ムンドウィッフ・オクタール

の世代であり、その前は判らないことになる。しかしルア等は四二〇年代の後半に部族聯合の支配者となつたのであるから、ルア等の前の世代はそれより前の年代に當ることだけは判る。魏書に所謂三世を忽倪を入れた數へ方とすれば、匈奴の粟特國―ヒルトによればアラン―征服はルア等の時代のこととしなければならず、三世を忽倪を入れた數へ方とすれば、それはルア等の前の世代になる。その何れにしてもフンのアラン征服の年代より遙か後であることは説明を要しない。江上波夫氏は粟特國傳の記事は中央アジアのソグディアナとクリミヤのズダックとの所傳の混淆したもので、匈奴侵入の記事はクリミヤに關するものであると論ぜられたが、忽倪をアッティラの子の何人かとする限りは、年代的に非常な不一致を生じてくることヒルト説の場合と全く同様である。即ちヒルトの考へ方はフンの歴史そのものから見ても成立し難いのである。

それでは匈奴による征服の事實は中央アジアのソグディアナの歴史には適合するであらうか。私は北魏の時代に粟特國が溫那沙と呼ばれたことは、隋書に康國（即ちサマルカンド）の王家が嘗て溫姓を稱したと記されてゐる事實と一致するもので、これこそ中央アジアのソグディアナ地方が匈奴によつて征服支配せられたことを示すものと考へる。この溫那沙と溫姓との同一性に注意せられたのは白鳥博士である。

白鳥博士は隋書^三ハの康國傳に

康國者康居之後也、遷徙無常、不恆故地、然自漢以來、相承不絕、其王本姓溫、月氏人也、舊居祁連山北昭武城、因被匈奴所破、西踰葱嶺、遂有其國、支庶各分王、故康國左右諸國、並以昭武爲姓、示不忘本也、^{（中略）}米國史國曹國何國安國小安國那色波國烏那曷國穆國、皆歸附之、

とあり、通典^三一九に

（康國）大業中遣使朝、其王姓溫、月氏人也、舊居祁連山昭武城、自被匈奴所破、西越葱嶺、遂有此國、枝庶各分王、

故康國左右諸國米國史曹國何國安國小安國那色波國烏那曷國穆國凡九國、皆其種類、並以昭武爲性、示不忘本也、

とあり、舊唐書^{一九}の康國傳に

康國卽漢康居之國也、其王姓溫、月氏先居張掖祁連山北昭武城、爲突厥所破、南依葱嶺、遂有其地、枝庶皆以昭武爲姓氏、不忘本也、

とあり、唐書^{二二}の康國傳に

康者^(中略)君姓溫、本月氏人、始居祁連山北昭武城、爲突厥所破、稍南依葱嶺、卽有其地、枝庶分王、曰安曰曹曰石曰米曰何曰火尋曰戊地曰史、世謂九姓、皆氏昭武、

とあつて、康國王の姓が溫である事實に注意し、この溫姓は魏書に粟特國一の名と傳へられる溫那沙の溫であり、溫那沙は「溫姓の九王」の意で、それは康國が昭武姓の九國に分れてゐた事實に一致するとせられ、次の如く論ぜられた。

康國王の一族は溫姓と昭武姓との二姓を同時に稱したといふことになるが、此の奇異なる事實は如何に解決すべきであらうか。然し當時に於ける中亞細亞の社會狀態を承知したならば、此の事實は必ずしも不思議でなく、又此の問題は決して難解のものではない。何故かといふと、南北朝の時代に *Sogd* の君主をはじめ凡べて上流の社會はトルコの種の嚙嚙人があり、此の時代の末から唐代に互つて、其の地位を襲うて治者となつたのは、同人種の突厥人であつて、其の臣民となつてゐたのは常に土着のイラン人であつた。之を手短かに言ひ換へると、*Sogd* の國家は人種と言語とを異にした二民族から成立つてゐたのである。だから溫といふのはイラン人が王家の姓をいふ名で、昭武といふのはトルコ種の上流階級が王家の姓をいふ名である。其れは恰かも那沙がイラン人の九王を呼ぶ名であり、特拘夢がトルコ人の之を稱へる名であるのと同様の事である。それ故に粟特の一名を溫那沙といふのは、土着のイラン人の稱呼で、その一名を

特拘夢といふのは、トルコ人の稱呼であつて、なほ精しくは昭武特拘夢といふべきである。⁽⁴⁶⁾

特拘夢といふのは通典^三粟弋の條に粟弋即ちソグディアナの一名として記されてゐるものである。

粟弋後魏通焉、在葱嶺「西」、大國、一名粟特、一名特拘夢、

博士はこれをトルコ語「Toquz manab（九王の意）」の對音とし、溫那沙・昭武九姓を總稱するトルコ名と考へられた。即ち博士によれば、粟特國を征服した匈奴はエフタルであり、更にソグディアナはその後突厥に支配せられた、エフタルや突厥はソグディアナ土着のイラン人をその支配下に置き、ソグディアナはトルコ系の征服者階級とイラン系の被征服者階級との二階層に分れた、その結果王家の姓（即ち征服者たるトルコ系王家の姓）がイラン系の人々からは溫那沙、トルコ系の人々からは昭武、又は（昭武）特拘夢と呼ばれたといふのである。博士は晩年この匈奴をエフタルでなく悅般に據つた匈奴であると改められたが、博士は悅般を以てトルコ系民族と見る論者であるから、粟特に進攻した匈奴は匈奴と悅般との聯合體であつたわけである。兩者が如何なる關係に於いて聯合してゐたか、又ソグディアナに君臨した匈奴王家が純粹の匈奴であつたのか、悅般であつたのか、又は兩者の混血したものであつたのか、博士は語つてゐられないが、とにかくこの匈奴王家が溫那沙とも、昭武とも、（昭武）特拘夢とも呼ばれたといふのである。しかしソグディアナが九姓に分れてゐたり、その支配者が同時に溫・昭武の二つの名で呼ばれたりしたことが果してあり得たであらうか。私は甚だこれを疑ふものである。

先づ隋書の文面を熟讀すると、「其王本姓溫」とある。これは明かに康國王家の姓が以前には溫であつた意味である。そして「支庶各分王、故康國左右諸國、並以昭武爲姓」とあるのは、隋代には康國王族の姓が昭武であつたことを示してゐる。即ち康國王の姓は溫から昭武に變つたのであつて、溫・昭武の兩姓が并存してゐたのではない。その證據には、隋唐代にはソグディアナ及びその近傍の諸國に昭武某といふ名の王は何人か傳へられてゐるけれども、溫某といふ王は一人も傳へられ

てゐない。隋書以下前に掲げた諸書は祁連山北の昭武姓とを結びつけるために、康國の王家が漢代以來連綿として續いてゐるやうに書いてゐるが、それは決して事實とは考へられない。白鳥博士は「溫氏は此の一族の舊姓で、昭武は後に改めた新姓と見るのは甚だ穩當の解釋と思はれるかも知らぬ」と言はれながらも、敢へてこの穩當な解釋を排して、溫姓と昭武姓との併存を認め、溫はイラン人が王家の姓を呼ぶ名で、昭武はトルコ人が同じ王家の姓を呼ぶ名であると言はれるけれども、かうした解釋が成立するためには、溫と昭武とが同じ意味を示すイラン語とトルコ語とであるといふことが先づ必要である。それでなければ同じ王家の姓がイラン人からは溫、トルコ人からは昭武と明かに異つた名稱で呼ばれる筈がない。しかし現在の言語及び歴史の知識をもつてしては、溫と昭武とが同義のイラン語とトルコ語であることを立證することは不可能のやうである。

白鳥博士がかうした無理な解釋をせられた最大の原因は、溫那沙を「溫姓の九王」とし、これを隋唐代にソグディアナを支配した昭武姓の九王に一致させようとせられたことにある。しかし隋書・通典・舊唐書・唐書の關係記事を比較して見ると、昭武九姓なるものは唐書に至つて始めて現はれるもので、それ以前の諸書には絶えて所見がない。即ち、隋書には康國の支配下に九國があつたことを記してゐるが、これらがすべて昭武姓の國であるとは斷言してゐない。たゞ文中に「故康國左右諸國、並以昭武爲姓」とあり、九國の中、小安國と那色波國以外は隋書に傳があつて、その王が何れも昭武姓であつたことを記してゐるので、これら九國のすべてが昭武姓であるとしても差支へないであらう。が、隋書にはこの他に鑠汗(Berghana)と漕國(Zabul, Ghazna)とが昭武姓の國として挙げられてゐるから、米國以下の九國がすべて昭武姓であつたとすると、これに康國と鑠汗・漕の二國を加へた計十二國がソグディアナ及びその附近の昭武姓の國として支那に知られてゐたことになる。しかし隋書にはソグディアナが九姓と呼ばれてゐたことは絶えて記されてゐない。通典は隋書の文章に

若干の變更を加へて米國以下の九國が昭武姓であることを明言してゐる。舊唐書にはソグディアナの昭武姓の國名はすべて省かれてゐる。そして唐書に至つて始めて「世に九姓と謂ふ」ものを擧げて、康・安・曹・石・米・何・火尋・戊地・史の九國をこれに擬した。唐書の西域傳は宋代諸種の資料に基いて編纂せられたものであつて、随分杜撰な部分があるが、この九姓に關する記事が何かに基いたのか、又は唐書の編者の獨自の判斷によつたものか明かでない。思ふに、唐書の編者は唐代ソグド人が九胡とか、九國胡とか、九姓胡とか、九姓商胡とか呼ばれてゐた事實から、その本國のソグディアナも九姓に分れてゐるものと誤解し、右の九國をこれに當てたのであらう。しかも唐書の選擇がよい加減なものであることは、九國の中、火尋と石とは昭武姓でなく、唐書^{二二}に昭武姓と明記してある東安（喝汗、Garkham, Bukhara の東北）が九國の中に入れてゐないことでもわかる。東安は西域記一にも記載されてゐて、唐初から支那に知られてゐた筈であるのに、唐書の編者がこれを九國の中に加へず、「世謂九姓、皆氏昭武」と言ひながら、昭武姓でない石・火尋の二國を數へてゐるのは頗る了解に苦む所である。支那に來住したソグディアナ人が九姓胡・九姓商胡などと稱されたのは、彼等がその出身地である康・安・曹・石・米・何・史・穆・畢などソグディアナ及びその附近の國名の支那に於ける略稱を姓としてゐたからに他ならない。舊唐書^九一〇李嗣業傳に

（天寶）十載（七五二）、又從平石國、及破九國胡并背叛突騎施、

とあるのは、この頃ソグディアナのソグド人が九國胡と總稱されてゐたことを示すものであらう。プリープランク教授は九姓胡の名はオルドス方面に來往したソグド人に對する呼稱から起つたものであらうとせられたが、何れにしても、これは唐代ソグド人を總稱する名であつたのである。しかしそれは勿論支那に來往したソグト人が支那風に九姓を稱したのをいふのであつて、ソグディアナそのものが九姓に分れてゐたことを意味するのではない。隋書にも記されてゐるやうに、ソグデ

イアナの諸國の王家は昭武一姓に統一されてゐたのであつて、昭武以下九姓に分れてゐたのではない筈である。異なる姓が九つあつてこそ九姓であるが、姓が一つしかないのに九姓と言はれる筈がない。唐書に康國が九姓に分れてゐたとし、しかもそれらがすべて昭武と稱したといふのは自家撞著も甚しいではないか。私はソグディアナが九姓に分れてゐたといふのは、支那のソグド人が九姓胡などと稱はれてゐたことに基く誤つた類推に他ならないと思ふ。従つてこの九姓と昭武とを結びつけて、ソグディアナの昭武姓の諸國のどれがこの九つに入るかと論ずることは全く無用の詮索であると言はざるを得ない。

突厥の闕特勤碑文 (HE 31 : 39) に *alti čub sorđiq* (及び *šitādm*) (*alti čub sorđiq* 及び我等 (我) 征したり) の句がある。⁽⁸⁾ この *alti čub sorđiq* にはこの三語を一つの名稱として「六姓 *čub* のソグド」とする解と *alti čub* と *sorđiq* とを分けてそれぞれ別な名稱とするの二つある。⁽⁹⁾ 今多くの人々の採つてゐるのは前の解釋であるが、すべての學者がこの解釋を採用してゐるのではない。碑文の解讀者として名高いトムセンも晩年には後説に従つてゐる。⁽¹⁰⁾ 最近でもガベイン氏 (A. v. Gabain, *Altürkische Grammatik*, 2. Auf. Leipzig 1950, S. 308) やマールン氏 (S. E. Malov, *Pamyatniki drevneturkskoj pismennosti*, Moskva 1951, s. 40, 376) は *alti čub* と *sorđiq* とを一つのものと二つ扱つてゐる。兩者を一続きのものとして、これを「六姓昭武のソグド」と解するのは全くソグディアナが九姓昭武から成つてゐたといふ唐書の記載に基くもので他に確かな論據があるものではない。同じ碑文及び敦欲谷碑文には *sorđ* が一回、*sorđiq* が三回現れてゐるが、*alti čub sorđiq* とあるのは闕特勤碑の二回だけである。即ちソグドの名は必ずしも常に *alti čub* と連稱されてゐないのであつて、*alti čub sorđiq* と二つに解すべきか、*alti čub* と *sorđiq* と二つに別つべきかはなほ明かでない。殊に *čub* と昭武とは似てゐるが全く同一であるとは言へないのである。突厥碑文には *ič quřiq(a)n* (三姓骨利幹) *ot(u)z t(a)č(a)r* (三十姓纥鞞) などの用法があるから *alti čub* を六姓 *čub* とするのは差支へないが、これは *čub* と總稱

される民族が六姓から成つてゐたための呼稱でなければならぬ。所が隋書以下の記載や王名の實例に徴する限り、昭武は姓であつて或る部族の總稱とは考へられないし、昭武が六姓（又は九姓）に分れてゐた形迹は全く認められない。altai čub は民族の名かも知れないが、又地名かも知れない。何れにしてもこれとソグドとを結びつけて解釋するのには疑問がある。況やソグディアナを九姓に分けるのが唐書の誤解としか考へられぬに於いては、これを「六姓昭武のソグド」と讀むことは愈々疑はしい。なほソグディアナと九姓昭武との聯關のないことを最初に論ぜられたのは、ブリーブランド教授であつて、私の議論も全く氏の着眼から出發してゐる。私は教授の結論は不易の鐵案であると信ずる。

白鳥博士は溫那沙を溫姓の九王と解釋し、特拘夢を九王の意味だとせられた。これは康國が九姓に分れてゐたといふ唐書の記載を信ぜられた結果である。しかしながら、既に唐書の記事が誤で、ソグディアナ地方の王姓が昭武一姓であつたとすれば、溫那沙・特拘夢の名稱も九の數に拘泥して解釋する必要はない。嘗てマルクワルトは溫那沙を以て *Hunastan 若くは *Hunashah の對音とし、「フン國」又は「フン王」を意味するものと考へた。私は溫那沙の溫那を *Ouwa* (Hüma) 沙を *shah* の音譯と看做し、これを匈奴王の意に解する。ソグディアナが溫那沙と呼ばれたのは、必ずこの地方が匈奴によつて征服支配せられたために相違ない。隋書及びそれに基いた諸書には康國の王家が祁連山北の昭武城から移動した趣に書いてあるが、それは昭武姓と昭武城とを結びつけたための妄説であり、王家が(大)月氏の出であるといふのも、祁連山北方が大月氏の舊領土であつたことに基くものに違なく、王家が匈奴に逐はれたといふのも、大月氏が匈奴に逐はれて西遷したといふ所傳を念頭に置いての作爲に他なるまい。従つて康國王家が匈奴に逐はれて祁連山北部から西遷したといふ隋書の記事は全く信じられないけれども、康國王家が嘗て溫姓を稱した事實は中央アジアのソグディアナが嘗て匈奴によつて征服せられ、匈奴が支配者としてこれに君臨したことを雄辯に物語つてゐると考へられる。溫姓の溫は、*Ouwa* 又は *Ouwo* などの

略譯であらう。従つて魏書の西域傳に謂ふ匈奴の粟特國征服の記述は、中央アジアのソグディアナに關するものとして何等差支へない。

それでは特拘夢とは何であるか。ヒルトはこれを「Turkoman」と解し、岑仲勉氏はこれを「Koman (Coman = Kipchak) の譯音と見た。⁽⁵⁵⁾ 通典のこの記事が何に基いてゐるのか今日では判らないが、太平御覽六九 四部叢刊三編 景印宋刊本に引く通典には

通典曰、栗弋、後魏通焉、在葱嶺西、大國、一名栗特、一名拘夢、

とある。この栗弋・栗特は明かに栗弋・栗特の誤である。何元錫の合鈔宋本太平御覽や鮑氏刊本には栗弋・栗特に作り、更に鮑氏刊本では拘夢を指夢に作つてゐる。思ふに通行本通典の「一名特拘夢」の特は衍字で、拘夢又は指夢は招夢の訛であり、招夢は即ち昭武の異譯に他ならないであらう。招夢・昭武は恐らく共に *caub, *caubu, *zaub, *zaubu などの音を寫したもので、ソグディアナを征服支配したエフタルの王族の姓（又は稱號）であらう。西北インドに君臨したエフタル王トラマーナの碑文に王を稱して「王中の大王 Toramaṇa sahi jayvīa」と言つてゐる。⁽⁵⁶⁾ この jayvīa についてはなほ定説がないけれども、私はこれをエフタル王族の姓又は稱號とし、昭武はその對音と看做するのである。言ひ換へると、昭武姓の王を頂く國は嘗てエフタルによつて征服せられ、エフタルの後裔の支配が続いてゐた所であらう。その分布は北はフェルガーナからソグディアナを経て南はガズナに及んでゐる。この地域は明かに嘗てエフタルに支配せられた區域である。エフタルは匈奴の征服したソグディアナを匈奴から奪つてこれに君臨した。この結果溫姓の匈奴王家は亡びて昭武姓のエフタル王家が代つた。エフタルのソグディアナ征服は、私の研究によると、紀元五世紀の中頃のことと、董琬等が西域に奉使した四三七年以後の事に屬する。従つて通典に所謂「一名栗特、一名特拘夢、[招夢]」が原本魏書の西域傳から引用されたものとしても、それは董琬等の報告にはなかつた筈である。

以上論じた所によつて、魏書西域傳の粟特國は中央アジアのソグディアナであつて、クリミヤのスタック（ソルグディア）とは到底考へられないことが明かにされたであらう。魏書の粟特國は（一）原本書西域傳の根本資料の一つである董琬等の報告に於ける諸國の配置から考へても、（二）粟特國傳自身の内容から推しても、斷じてクリミヤ半島やフンに關係のある國ではあり得ない。從來の研究者の多くがそれをクリミヤ半島やフンに關係があると解したのは、粟特國が古の奄蔡だといふ記事に誤られたのである。粟特國と奄蔡とを結びつけたのが董琬等であつたらうことは既に述べた。それでは何故に兩者が結びつけられたのであるか。ここにその事を論じて本文の結びとしよう。

董琬等は太延三年（四三七）鄯善以下九國を招撫すべく西域に出發し、豫定の九國の他に洛那・者舌の二國をも訪問して歸つたことになつてゐる。もしこれらの諸國を全部廻るとすれば、鄯善から天山南路に至り、烏孫・悅般等天山路の國をも往訪しつつ疏勒（Kashgar）からフェルガーナに出、者舌（Tashkend）を経て粟特國を訪れ、再び來た道を引返すか、又はソグディアナを通過してアム河の上流域に至り、渴槃陀（Tashkurgan）に出で、再びタリム盆地に歸つて來るかすべきである。明の永樂十二年正月十三日肅州城を發した陳誠等の一行は、哈密（Hami）土兒番（Turfan）から天山の北麓に出で、阿力馬力（Almalik）を経て塞藍（Sairan）達失干（Tashkend）に至り、七月二十一日散馬兒罕（Samar kand）に着き、更に進んで同年十月一日目的地である哈烈（Herat）に到つた。⁽⁶⁾一行がアム河流域を通つてパミールを越え、北京に歸還したのは永樂十三年十月癸巳のことである。一行の往路の旅行の詳細は幸に残された日記「西域行程記」（北平圖書館善本叢書所收）によつて知られるが、それは相當な強行軍であつたやうである。それでもサマルカンドまで行くのに六ヶ月餘を費してゐる。董琬等が代を出發したのは太延三年三月癸巳以後のある時であるが、一行の歸還が同じ年の十一月であつたといふ推定が正しいとすれば、往復約七、八ヶ月であつて、時間的に言つても到底豫定の國々のすべてを廻ることは不可能で

あり、當然その幾つかが省略された筈である。就中、粟特國には必ず行かなかつたであらう。それは烏孫で洛那・者舌が魏と通交を欲してゐることを聞かされた結果、烏孫の導譯を得て董琬と高明とがこの兩國にそれぞれ手分けをして行つてゐることからも想像される。一行は者舌の南方に粟特國があり、そこに到るには者舌を通過すべきことを知つてゐた様子がない。さて一行は歸還して復命書を作成した。その時主として利用されたのは一行の實際の見聞と史記・漢書・三國志（裴松之の註本は元嘉六年（四二九）に奉られてゐる）、或ひは魏略などの西域關係の記事であつたであらう。董琬等は西域の十六國について報告したが、その序記として西域の地理の概説を試みた。それは大體に於いて今日の地理に適合するもので、彼等の地理的認識が頗る正確であつたことを示してゐる。しかし不幸にしてアラル海以西については十分に知る所がなかつた。彼等はアラル海の存在は知つてゐたであらう。そしてこれが右に挙げた前代の史書に奄蔡の近傍にあるとされる大澤に他ならないことも判定し得たに相違ない。しかしこの大澤は康居の西北二千里ほどの奄蔡の附近にあるとのみあるので、當時の地理で言へばどこに當るのか、これを決定することが是非必要であつた。それは奄蔡がどこであるかを決定することである。彼等は奄蔡類似の地名を搜した。そして奄蔡と最も似てゐるのが粟特の一名溫那沙であることを發見した。かくて溫那沙即ち粟特が古の奄蔡に比定せられ、大澤はこの附近から北へ、又西へ無限に擴つてゐると定められたのであらう。この比定には彼等は頗る苦心したに相違ないが、その苦心が後世ヒルト以下東西の學者に誤解の端緒を與へようとは豫期しなかつたと思はれる。

私は本稿に於いて粟特國に侵入した匈奴が如何なる匈奴であるかを明かにする豫定であつた。しかし定められた紙幅では到底それに及ぶことが出来ないで、今はただ粟特國傳の記事が匈奴・フン同族論の根據にはなり得ないことを論證するに止める。重ねて言ふ。私は匈奴・フンの同族たることを否定しようとするものではない。フンと匈奴との同族たることを決

註

定するためには、更に積極的な證據が必要であると主張するのである。私は自己の議論をやるに徒らに急であつて、先學諸氏の所論の一々について自説との異同を十分に辨する邊がなかつた。庶幾くは、讀者に於いてこれを詳かに判ぜられんことを。私が本文の劈頭に比較的詳細に先學の所説を引用したのは専ら讀者参照の便に供せんがためである。(昭和三十年一月)

(1) 匈奴・フン同族非同族問題研究の回顧については、江上波夫氏

「匈奴・フン同族論」(「ユーラシア古代北方文化」、東京、昭和二十三年、三一—九頁以下)、内田吟風氏「今世紀におけるフン問題研究の回顧と明日への課題」(「民族學研究」十四ノ三、昭和二十五年、四七—五五頁)、角田文衛氏「フン族と匈奴」(「古代北方文化の研究」、京都、昭和二十九年、一九—二〇九頁)及びそこに引用せられてゐる諸論著を参照せよ。なほヒルトの比定を排する E. H. Parker, *A Thousand Years of the Tartars*, 2nd ed., p. 122 及びフンと匈奴との名稱の同一であり得ざることを主張する O. Maenchen-Helfen, *Huns and Hsiung-nu* (Byzantium, XVII, 1944—1945, pp. 222—243) 兩者の同一民族たることを主張する L. Ligeti 氏及びそれに疑を挟んでゐる G. Németh 氏の説などをつけ加へる必要があるので (G. Németh, ed. by, *Attila és hujai*, Budapest 1940, pp. 11—63, 265—270, cf. D. Sinor, *Dix années d'orientalisme hongrois*, 1940—1950, JA, 1951, pp. 217, 219)。

(2) F. Altheim, *Attila und die Hunnen*. Baden-Baden 1951.
B. A. Vredenski, *Enciklopedicheski slovar*, 1, Moskva 1953,

S. 493.

(3) 内田氏の匈奴に關する論考を集めた「匈奴史研究」(大阪、昭和二十八年)はまだ偶目の機を得ない。参照したのは諸雜誌に發表されたものである。従つてその後改訂を加へられたか否かを詳かにし得なかつた。

(4) 十三州志のこの記事の引用は太平寰宇記^{六八}が最も早いやうである。張澍はその輯本でこれを太平御覽に引かれてゐるやうに言つてゐるけれども、それは誤である。洪鈞もこれを元史類編から引用してゐるが(元史譯文證補^{二七})、元史類編は恐らく太平寰宇記から再引用したのであらう。

(5) 「匈奴西移年表」(東洋史研究二ノ一、一五—三五頁)。同「後魏柔然年表」(東洋史研究、八ノ五・六、六八—六九頁)。

(6) 始め東洋學報十四ノ四(大正十三年)に發表せられ、後英譯せられて東洋文庫歐文紀要第二冊(昭和三年)に掲載、更に「西域史研究」エ(東京、昭和十八年、五七一—六五頁)に收められた。英譯に對してペリオの批評がある。曰く「Dans bien des cas, je crois que les textes peuvent être serrés de plus près, et que d'autres

solutions de détail sont préférables. (T'oung Pao, XXVI, 1929, p. 365).

- (7) 「蒙古及び突厥の起源」(史學雜誌、五一ノ二、一二五頁)。
- (8) 「匈奴・フン同族論」(「ユーラシア古代北方文化」所收)。
- (9) 「魏書粟特國傳と匈奴Ⅱフンネン問題」(人文二ノ一、一〇六頁)、「匈奴フン同族論の批判」(東洋文化一、一五二—一五七頁)。
 なほ前者については角田文衛氏の批評がある(「古代北方文化の研究」二〇六頁)。
- (10) 内田吟風氏「魏書の成立に就いて」(東洋史研究、二ノ六、二一頁)は魏書補綴の時期について少くとも宋の淳熙五年(一一七八)以前に行はれた事を認めねばならぬと言はれてゐるが、私は嘉祐六年(一一〇六)以前と考へる。
- (11) 玉井是博「大唐六典及び通典の宋刊本に就いて」(支那學、七、三〇三頁、「支那社會經濟史研究」四四四—四四六頁)。なほ内藤虎次郎博士「擬策一道」(「狩野教授還曆記念支那學論叢」五一—八頁)及び鄭鶴聲「杜佑年譜」(上海、一九三四、九六—九七、一〇七—一〇八頁)参照。
- (12) 疑年錄彙編卷三(民國十四年版、三丁右)。
- (13) 以上については松田壽男博士「魏書西域傳の批判と悅般國の方位」(大正大學學報第十輯、二五頁以下)参照。
- (14) 同右三三—三四頁。
- (15) 同右三一—三八頁。但し私はかかる距離の算出が行はれてゐるが故に、董琬等はその國には行かなかつたといふ松田博士の論法に

は必ずしも賛成出来ない。この論法で行くと、董琬等は鄯善・焉耆・龜茲の三國にしか行かなかつたことになる。私はこれを董琬等の距離の算出の一つの方法であつて、實際にその國を訪れなかつたことを意味するとは考へない。

- (16) 「大秦傳より見たる西域の地理」(「西域史研究」下、四八五—四八六頁。なほ漕國についての博士の見解の詳細は、「屬賓國考」(「西域史研究」上、四五〇頁以下)に見える。
- (17) 拙稿「エフタル民族に於けるイラン的要素」(史學雜誌六一ノ一、一七頁)。通説は唐書^三に「屬賓國隋漕國也」とあるのに基いてゐるが、唐書の比定が何に拠つてゐるのか明かでない。
- (18) 白鳥博士の大秦國に關する諸論考、就中「大秦傳より見たる西域の地理」(「西域史研究」下、四七二頁以下)を参照せよ。
- (19) 同右四八六—四八七頁。
- (20) 白鳥博士「西域史研究」上、一〇一—一〇二頁、下、四八〇—四八一、四八七頁。
- (21) 後漢書の章懷太子の注に「大秦國在西海西、故曰秦海也」とあるが、西海は地中海のことであるから、この注は誤つてゐる。なほ内田吟風氏はこの注に基いて秦海を黒海に比定し、この記事を以て當時匈奴が黒海の沿岸にまで進出してゐたと考へられた(「匈奴西移年表」東洋史研究、二ノ一、二五頁)。しかし蒲類と連稱される秦海はアラル海であるべきである。
- (22) 「西域史研究」下、四七六頁。
- (23) 「西域史研究」下、四七六—四七七、四八七頁。

(24) 北史の西域傳には魏書から採つたと思はれる條支國の傳があるが、現行の魏書には缺けてゐる。この條支國はそこから西行して海曲を渡る起點である。又、大秦傳では安息の西界から海曲に循つても大秦國に行けることを記してゐる。これらは明らかに魏略そのものか三國志注引の同書などの記事と董琬自身の知識とを合せての記事であるが、條支や安息について董琬等がその報告の中に別に傳を立てたか否かは明かでない。

(25) 山海經の記事と魏略のそれとの關係は明かでない。恐らく共通のある資料によつたものであらう。山海經の記事については小川琢治博士「支那歴史地理研究」續編(京都、昭和四年)一〇八頁以下(「内藤博士還曆記念支那學論叢」二七二頁以下) G. Haloun, *Seit wann kannten die Chinesen die Tocharer*, I, Leipzig 1926, S. 146—147 々、魏略の記事については Hirth, *China and the Roman Orient*, Shanghai and Hongkong 1885, pp. 77, 114, 中譯博士「西域史研究」下、八九—九一頁を参照のこと。

(26) Bretschneider, *Medieval Researches*, I, p. 149, note. 399.
(27) 虞世南の師子賦は全唐文一三八(一左—二左)に收められてゐる。

(28) 明一統志八(撒馬兒罕及び哈烈の條)「陳誠「西域番國志」(北平圖書館善本叢書「十一」左)「吉水縣志」六、李思勉「獅子賦」(真明文苑三所收) Bretschneider, *Medieval Researches*, II, pp. 265, 266, 276 等参照。

(29) その一斑については、東洋文化、一、一五五、一五七頁参照。

(30) 「西域史研究」下、四七九、六四二—六四三頁。

(31) 「西域史研究」下、四八一—四八四、六二八—六四三頁。

(32) 「西域史研究」上、一〇四、下、二〇〇—二〇三、六四六—六六二頁。

(33) 太平御覽七九七(沙州記には張衡輯本がある。二西堂叢書所收) 又は G. Haloun, *Zur Velt-Frage*, ZDMG, 91 (NF. 16), S. 275 Ann. 3 参照。

(34) 松田博士「吐谷渾遣使考」(史學雜誌、六八、一三九三頁)。

(35) 白鳥博士は疊沓を沓疊の到置であるとしてこれを kumis の譯音とせられた(「西域史研究」上、一〇五—一〇六頁)。その理由は明かでない。

(36) Bretschneider, *Medieval Researches*, II, pp. 68—73.

(37) この譯名については詳しくは D. Sinor, *Autour d'une migration de peuples au V^e siècle*, JA, 1946—1947, pp. 1—73 (Extrait) に見え。

(38) G. Moravcsik, *Byzantinoturcica*, 2 Vols., Budapest 1942—1943 参照。

(39) 魏書二北史三關駟列傳。

(40) W. B. Henning, *The date of the Sogdian ancient letters*, BSOAS, 1948, xii, pp. 601—615.; H. Reichelt, *Die sogdischen Handschriftenreste des Britischen Museums*, II, Heidelberg 1931.
(41) Wang Yi-tung, *Slaves and other comparable Social Groups during the Northern Dynasties* (386—618), HJAS, 16, 3/4,

1953, p. 362 はこれら粟特國の商人は奴隸にちれたといつてゐる。

(41) E. H. Mims, *Scythians and Greeks*, Cambridge 1913, p. 19.

(42) G. Moravcsik, *Byzantinoturcica*, I, p. 302.

(43) W. Heyd, *Histoire du commerce dans le Levant au moyen-âge*, 2nd ed., I, Leipzig 1923, pp. 297 ff.; G. J. Bratianu, *Recherches sur le commerce génois dans la Mer Noire au XIII^e siècle*, Paris 1923, p. 39, etc.; B. Spuler, *Die Goldene Horde*, Leipzig 1943; W. W. Rockhill, *The Journey of William Rubruck*, London 1900, p. 43, n. 2.

(44) E. A. Thompson 氏がヒルト説が正しいければ、フツチラの發後直ちにヘルナツク治下の商人の支那北部への活潑な發展があつたことになるが、ヒルト説は頗る疑はしい (more than doubtful) と書いてゐるのは正しい (A History of Attila and the Huns, Oxford 1948, p. 175)。

(45) E. A. Thompson, *A History of Attila and the Huns*, Oxford 1948, p. 148; H. Homeyer, *Attila, der Hunnenkönig*, Berlin 1951, S. 189 u. Synoptische Tafel 等参照。但し B. Spuler *Geschichte Mittelasiens in Geschichte Asiens*, München 1950, S. 321 にはなほ舊説の四五四年説を採つてゐる。

(46) 「西域史研究」下、一五五頁。

(47) 例へば「冊府元龜奉使部外臣部索引」五九二頁、「西域史研究」下、一五三頁等を見よ。

(48) 桑原博士「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」(「東洋

文明史論叢」三七六—三七八頁)、小野川秀美氏「突厥碑文譯註」(「滿蒙史論叢」四、一一七頁注九四)、同「河曲六州胡の沿革」(「東亞人文學報」一〇四、一九三—二二六頁)、伊瀨仙太郎氏「盛唐以後の西域經營」(東京學藝大學研究報告、第四輯、別刷、五頁)参照。

(49) E. G. Puleyblank, *A Sogdian Colony in Inner Mongolia*, TP, XII, pp. 320—322 note.

(50) 小野川秀美氏「突厥碑文譯註」(前引、五一、五四頁)。

(51) 「西域史研究」ト、一〇一—一〇二頁。

(52) W. Thomsen, *Altürkischen Inschriften aus der Mongolei*, (übersetzt von H. H. Schaeder), ZDMG 1924, p. 151.

(53) 王國維「西胡考」下(觀堂集林、十三、遺書本十二下左及十四上)に九姓昭武を一つの民族と解し、ソグド人を北方系游牧民族と看做してゐる。これ亦實在せざる九姓昭武なる名稱に誤られたものであるが、氏が九姓昭武と言ふ以上は三姓葛勒・九姓廻鶻・十姓突厥と同性質の名稱と解すべきであるとされたのは正しい。所謂トハラ語Aの原名として *arsī* の稱が取上げられ、これが突厥碑文の *Toqaz ašin* と結びつけられ、更に焉耆の國內に九城のあつたこと(隋書八三)に基づいて、*arsī* = *arsin* = 焉耆(耆)で、所謂トハラ語Aは焉耆(耆)語と呼ぶべきであるといふ説がある(E. Sieg, *Ein einheimischer Name für Toḫrī, SBW*, 1918, S. 560 ff., dazu E. Schwenker, *Tocharisch*, Berlin u. Leipzig 1935 S. 15 u. H. W. Bailey, *Taungara, BSOS*, 1935—37, p. 906 ff.; H. H. Schaefer, *Sprachwiss.* Abend 21, Jan. 1936, Sonderdruck [cf. ZDMG,

1937, p. 254, Ann. 3] 王靜如「重論 *āstī, argī* 與焉夷・焉者」史學集刊「五、民國三六」。隋代焉者の國內に九城があつたといふのは、都城を含めて九城なのか、都城の他に九城なのか明かでない。「都城方二里、國內有九城」といふ文面からすると都城の他に九城あつたといふのが本意らしいが、何れにしても *Toquz āstin* といふ表現は *āstin* 部族が九姓から成つてゐたことを意味するもので、決して九城から成つてゐる *āstin* とは解釋出來ない。なほ突厥碑文の *āstin* は「*āstin* までは征したが、チベクトには僅かに達しなかつた」といふ文面から「チベクト近傍の民族又は土地 (A. v. Gabain, Altürkische Grammatik, S. 299) 又ははは河曲九曲の地 (小野川秀美氏「突厥碑文譯注」八七頁注九)」、或はカ羅斯チー文書 (E. J. Rapson & others, *Kharosīhi Inscriptions*, I, No. 7) の *arsin* (人名) 等 (H. W. Bailey, *Turks in Khitanese Texts*, JRAS 1939, p. 89) とか言はれ、今日なほ定論を得ない。私はこれを民族名とすべきであらうと信ずる。

(75) J. Marquart, *Die nichtslavischen (albulgarischen) Ausdrücke in der bulgarischen Fürstenliste*, TP, 1910, pp. 660—661.

(56) この名はソノの一稱として Joannes Malalas の年代記に見え (ed. L. Dindorf, Bonn 1831, p. 359 (2)). G. Moravcsik, *Byzantinoturcica*, II, S. 199, I, S. 184—185 参照。白鳥博士は溫那沙の那沙をイラン語 *na-shah* で九王の意味だとせられるが、九王なら當然複數形の *na-shahan* でなければならぬ。又、九を意味する中世イラン語は *nau* で、那が果してその譯であり得るか否か、

頗る疑はしい。(梵語千字文「正藏五十四、一一九五中、一二〇二下、一二一四上」や梵語千字文(同上、一二二九下)に九 *Skt. nava* を那縛・義縛と譯してあるのを参照せよ。)ソンの名が匈奴から出てゐることは明かであつて、それは匈奴そのものがソンと稱はれてゐることによつても察せられる (W. Henning, *The date of the Sogdian ancient letters*, BSOAS, 1948, pp. 604 ff.)。ソンの名がビザンチン及び中央アジアの諸記録に如何なる形で、現はされてゐるかにつては「Kießling, Hunni (Paulys Realencyclopädie, VIII, 2, Stuttgart 1913, 2583—2615), G. Moravcsik, *Byzantinoturcica*, II, S. 199 ff., Henning, op. cit., p. 615 を見よ。溫の名は東突厥の木杆可汗を稱する突厥大伊尼溫、木汗(王褒「京師突厥寺碑」漢魏六朝百三名家集及び全周文所收)の中にも見える。大伊尼溫が一つの名稱でなく、大伊尼と溫との二つに分れることは、辨正論三に「(宇文泰)又爲大可汗大伊尼、造突厥寺」とあるので明かであるが、伊尼は *Altürk. ini, iniyi* の音譯で弟を意味し、大伊尼は即ち大弟子の意味に他ならないであらう。溫は恐らく匈奴のことで、東突厥も亦匈奴の餘裔を以つて自ら任じた事實を示すものと考へる。單文孤證、他に徴すべき史料がないが、大方の指教を俟つ(東洋文化、一、一五七頁参照)。この木杆可汗の稱號については、石田幹之助氏「突厥に於ける佛教」(史學雜誌、五六ノ十、八八頁)及び山崎宏博士「支那中世佛教の展開」(第二版、東京、昭和二十二年、八八五—八八七、九一四頁)を見よ。

(56) 「史記」「三三大宛傳」「漢書」九六上西域傳。

(57) 「西域史研究」下、一五二頁。

(58) 「漢書西域傳、奄蔡校釋」(輔仁學誌、四〇二、一一二二頁、同「再說欽察」(同上、五〇一・二、二〇〇頁)。

(59) G. Bühler, The New Inscription of Toramana Shala, Epigraphia Indica, I, pp. 238—241; O. Franke, Pali und Sanskrit, Strassburg 1902, S. 11.

(60) これについては別に發表する。

(61) 出發及びサマルカンド到着の時は西域行程記に「ヘラット到着の時日は吉水縣志卷六〇による。

(62) 陳誠の歸路については、姑く E. Bretschneider, Medieval Researches, II, p. 148, 神田喜一郎博士「明の陳誠の使西域記に就いて」(東洋學報、十六、三五一頁以下、後「東洋學說林」に收めらる)、満井隆行氏「明の陳誠の西使について」(山下先生還曆記念東洋史論文集、五八九—六一四頁)等の所說に従ふ。但し陳誠等が

果して歸路アム河上流からバミールを踰えて于闐方面に出たか否かについては、これを積極的に證するものがない。明實錄以下の諸書に陳誠が八答商(Badakhshan)一名八里を通過した如く書かれ、これが歸路アム河に傍つて東行した一證の如くにも考へられてゐるが、陳誠の報告によれば、これは八刺黑(西域行程記永樂十二年八月三十日の條、西域番國志十三丁右)一名八里(西域番國志)即ち Balkh であつて、Badakhshan ではない。實錄は文字の類似してゐる所からこれを Badakhshan であると誤解したのである。八刺黑は即ち陳誠が往路通過した所に他ならない。〔なほ陳誠が歸路于闐方面を通過しなかつたらしいことについては、松村潤氏「明史西域傳于闐に就いて」(東洋文庫研究部に於ける講演昭和三十年一月二十二日)にも論及されてゐる。本號所收。〕

(63) 明實錄による。

(東京大學教授)

四四〇頁(本號三二頁)への補記。

アッチラ歿後のフン族の動靜、就中、フン族が何處にゐたかについては、從來専ら Jornandes の記述に基いてカルパチャ山脈の東方、黒海沿岸方面とされてゐた。ヒルトが忽倪を Hernac に比定する最も重要な根據は Hernac が extrema minoris Scythiae に移動したとする Jornandes の記事であつて、ヒルトはこれをクリミヤに比定したのである。所が C. A. Macartney 氏の研究によると Jornandes のこの記述には不可解な點が多く、フンはアッチラの歿後も依然今のハンガリーの平原に據り、それより東方に退却した事實は認められなかつたのである。詳しくは C. A. Macartney, The End of the Huns (Byzantinisch-Neugriechische Jahrbücher, X, 1934, pp. 106—14)を参照せられたらう。もしこの説が正しければ、ヒルト説の重要な根據は失はれる。